

『古代アメリカ』19, 2016, pp.1-33

<論文>

マヤ南東地域サポティタン盆地の編年再考

ーテフクロノロジーと土器の分析からー

市川 彰

(名古屋大学高等研究院)

八木宏明

(愛媛大学大学院)

【要旨】

本稿の目的は、エルサルバドル共和国サポティタン盆地における編年を、時期決定の指標となる複数の火山灰層を有効に使い、サン・アンドレス遺跡とエル・カンビオ遺跡の土器分析を交えて、新たに提案することである。さらに、構築される編年と考古資料に基づき、可能な限りにおいて、サポティタン盆地の社会過程を復元する。分析の結果、サポティタン盆地では前 600 年から後 1200 年頃まで居住痕跡が確認でき、火山灰や土器の諸特徴から大きく 4 時期に区分する、新たなサポティタン盆地編年を構築することができた。この新編年案によって、サポティタン盆地内社会のイロパング火山噴火前後の状況や最盛期から終焉に至る過程をより詳細な時間軸で復元できるようになっただけでなく、盆地外の様々な社会集団との地域間関係の変化について通時的視点で捉えることが可能となった。

【キーワード】

編年、土器、サポティタン盆地、サン・アンドレス遺跡、エル・カンビオ遺跡

【目次】

1. はじめに
 2. 研究の背景
 3. サン・アンドレス遺跡の土器
 4. エル・カンビオ遺跡の土器
 5. サポティタン盆地の編年と社会過程
 6. メソアメリカ文明史の中のサポティタン盆地
 7. おわりに
-

1. はじめに

「編年」は、あらゆる考古学研究の根幹をなす。筆頭著者が参加している新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」では、メソアメリカ文明とアンデス文明の高精度編年を確立し、両者の詳細な社会変動に関する通時的比較研究を行うことが主な研究目的として掲げられている。時として微視的な地域研究に陥りがちな今日の研究細分化の流れにあって、巨視的に比較検討することは研究対象地域の歴史のダイナミズムを理解する上で重要であると筆者らは考える。しかしながら、マヤ南東地域^(註1)、具体的には現在のエルサルバドルでは、1970年代に編年が整備されて以降、ほとんど修正や精緻化されることなく今日に至っている。

そこで本稿^(註2)では、エルサルバドル共和国サポティタン盆地の編年を、時期決定の指標となる複数の火山灰層を有効に使い、土器分析を交えて、新たに提案したい。さらに、構築される編年と考古資料に基づき、可能な限りにおいて、サポティタン盆地の社会過程を復元し、メソアメリカ文明史の中に位置づける。

2. 研究の背景

2-1. 編年研究の動向

2-1.1) メソアメリカ考古学における編年研究

考古学研究の基礎となる時間軸の設定や構築、すなわち編年研究は、メソアメリカ考古学の黎明期よりみられる [e.g. Gamio 1922; Gordon and Phillips 1955]。1960年代以降には炭素14年代測定法の開発・応用、マヤ地域を中心とした土器のタイプ・バリエティ分類法の導入などにより、各地の編年体系が次第に確立されていった [Gifford 1976; Sabloff 1975; Taylor and Meighan eds. 1978]。しかし一方で、遺跡間またはより広域の社会過程を比較する上では、編年が粗すぎるとの指摘もある [Demarest 2011:360]。こうした中で2000年代以降、加速器質量分析の浸透によって微量な試料でも年代測定が可能になってきたこと、また年代測定データをさらに精緻化するベイズ統計の採用によってメソアメリカ考古学の編年研究は新時代を迎えている。広域編年構築の重要性が説かれ [Joyce 2004:1]、*Latin American Antiquity* 誌上で編年特集が組まれたことはその証左といえるだろう [Braswell and Gutiérrez 2014:375]。

近年の研究で重要なことは、単に編年の修正や精緻化だけではなく、それに伴い当該地域の社会過程や地域間交流の通時的変化に関する定説にも疑義が呈され、再検討が加えられている点にある。その代表例として挙げられるのが、セイバル遺跡とカミナルフユ遺跡の研究であろう。セイバル遺跡では精密な土器分析と大量の年代測定データから、土器編年の細分化に成功し、またマヤ地域の公共祭祀建造物の起源が前1000年ごろまで遡ることを明らかにした [青山 2015; Inomata et al. 2013]。さらに、カミナルフユ遺跡では先古典期中期・後期の下限年代が約300年新しくなることが指摘され、マヤ南部地域の社会過程の理解に大きなインパクトを与えたことは記憶に新しい [Inomata et al. 2014]。この他にもメキシコ中央高地、マヤ低地でも既存の編年体系の修正を迫る論考が次々と発表され、地域内外の通時的変化を共通の時間軸の中でより詳細に比較検討するための土台が整いつつある [嘉幡・村上 2015; Ball 2014; Braswell ed. 2012] (図1)。

2-1.2) エルサルバドルにおける編年研究の動向

では、筆者らがフィールドとするエルサルバドルの編年研究の動向はどうか。

最も基本となるのがチャルチュアバ遺跡の編年である。エルサルバドル西部に位置する同遺跡は、先古典期

年代 階層	マヤ南部・南東地域		本稿の研究対象地域					マヤ低地			メキシコ中央高地	
	カミナルフユ	コパン	チャルチュアパ①	チャルチュアパ②	サンタ・レティシア	サポティタン	新サポティタン編年	ケレバ	ティカル	セイバル	テオティワカン	
1200 後古典期前期	Chinautla		Ahal				IV 期					
1100	Ajampuc	Ejar	Matzin									
1000												
900	Pamplona	Coner	Payu			E 層	b	Lepa	Caban	Bayal		
800	Amatle	Cueva				G 層	III 期		Eznab	T-B Transition		
700									Imix	Tepejilote		
600	Esperanza	Acbi	Xocco				a	Shila II	Ik			
500											Metepec	
400	Aurora	Bijac	Vec	Vec	Vec			Shila I	Manik	Junco	Xotalpan	
300	Santa Clara						II 期		Cimi		Tiamimilolpa	
200	Arenal		後期	後期	後期	I 層			Cauac	Xate 2	Miccaotli	
100	Verbeña		Caynac	後期	後期	(I 層?)				1	Tzuacuali	
80			前期	前期	前期					3	Patlachique	
200	Providencia	Chabij	Chul	Chul	Chul		I 期	Uapala	Chuen	Cantuse 2	Cuanalan	
300			Chul							1		
400										3		
500	後期	Uir	Kal	Kal	Kal				Tzec	Escoba 2		
600	Las Charcas									1		
700	前期	Gordon	Colos	Colos						3		
800										2		
900	?	Rayo	Tok	後期						Real 1		
1000				前期								
1100												
1200												

図1 メソアメリカ各地の編年

(カミナルフユは Aurora 期まで Inomata et al. 2014、以降は Shook and Hatch 1999、コパンは Willey et al. 1994、チャルチュアパ①は Sharer 1978、チャルチュアパ②は Inomata et al. 2014、サンタ・レティシアは Demarest 1986、サポティタンは Beaudry 1983、ケレバは Andrews 1976、ティカルは Culbert 1993、セイバルは Xate 期まで Inomata et al. 2015、以降は Castillo y Inomata 2012、テオティワカンは Rattray 2001 を参照し、筆者作成。)

前期から後古典期後期までの居住痕跡が認められ、オルメカ、マヤ、テオティワカンの文化的影響も認められるマヤ南東地域を代表する遺跡である。編年研究は、古くは 1940 年代に遡ることができる [Boggs 1943; Longyear 1952]、体系的な編年は R・シャーラーによって組み立てられた [Sharer 1978 vol.III]。シャーラーによるチャルチュアパ編年はタイプ・バラエティ分類法の到達点と評され [寺崎 2002:72]、今日においても大きな改変がされることなく利用されている。

以後、チャルチュアパ遺跡編年を基軸として考古学研究が展開されていくが、現在までに既存の編年を層位的発掘に基づく考古資料をもって修正・精緻化しようとする試みは少ない。エルサルバドル西部のサンタ・レティシア遺跡、エルサルバドル中央部のサポティタン盆地の研究がほぼ唯一といってよい。サンタ・レティシア遺跡では、チャルチュアパ遺跡編年を軸として、カミナルフユ遺跡などマヤ南部地域の土器資料との比較を通じて主に先古典期編年の精緻化が図られた [Demarest 1986]。他方のサポティタン盆地では、チャルチュアパ遺跡編年と鍵層となる複数の火山灰層を指標として、広域的な踏査、エル・カンビオ遺跡とホヤ・デ・セレン遺跡の発掘調査で出土した土器資料を用いて、先古典後期から古典期後期の大まかな編年が打ち立てられた [Beaudry 1983]。この編年はイロパング火山灰やホヤ・デ・セレン遺跡の住居址などのコンテキストから採取された試料の炭素 14 年代測定も実施している [Sheets 1983:7]。後述するが、この年代測定ではイロパング火山の噴火年代は後 260±114 年、ロマ・カルデラ火山の噴火年代は後 590±60 年となっている。

2-2. 問題の所在

各地域の研究状況によっても異なるが、ここではサポティタン盆地を含むエルサルバドルを中心に問題の所在を明確にしておく。

エルサルバドルでは長い間、チャルチュアバ遺跡編年を指標として時期決定および社会過程について論じられてきた。そのために、いくつかの問題点が存在する。例えば、鍵層となる火山灰の年代の問題は見逃せない。編年が確立された当時のイロパンゴ火山の噴火年代は後 260 ± 114 年とされ、とりわけ先古典期後期から古典期前期にかけての社会変化を説明する論拠とされていた。しかし、現在ではイロパンゴ火山の噴火年代は、概ね後 400-550 年の範囲におさまると考えられている [Dull et al. 2001; Dull et al. 2010; Ichikawa 2016]。また、ホヤ・デ・セレンを襲ったロマ・カルデラ火山の噴火年代も当初は後 590 ± 60 年とされていたが、最新の較正曲線による炭素年代の暦年較正によれば現在では後 650 年頃とされている [Ichikawa 2016: 30; McKee 2007: 44]。したがって、研究者が採用する噴火年代によって歴史的解釈が変わりうる可能性が十分にある。

こうした具体的な解決課題があるものの、チャルチュアバ遺跡が学史的に重要な遺跡であること、また編年の精度も高いと評されていることを背景として、ほぼ無批判に使用されている現状が最も致命的な問題であると筆者らは考えている。それ故にエルサルバドルの考古学調査では、層序や出土状況、地域性、遺跡間にみられる齟齬などを考慮せず、チャルチュアバ遺跡編年に資料を単に当て嵌めようとする作業が目立つ。他地域において層位的発掘調査に基づいた編年の構築が急務である。そこで注目したのがサポティタン盆地である。

サポティタン盆地はエルサルバドル中央部に広がる面積約 182km^2 、標高平均 450m の盆地である (図 2)。サポティタン盆地では時期決定の指標となる複数の火山灰層が見られる点に編年研究を行う上での最大の利点

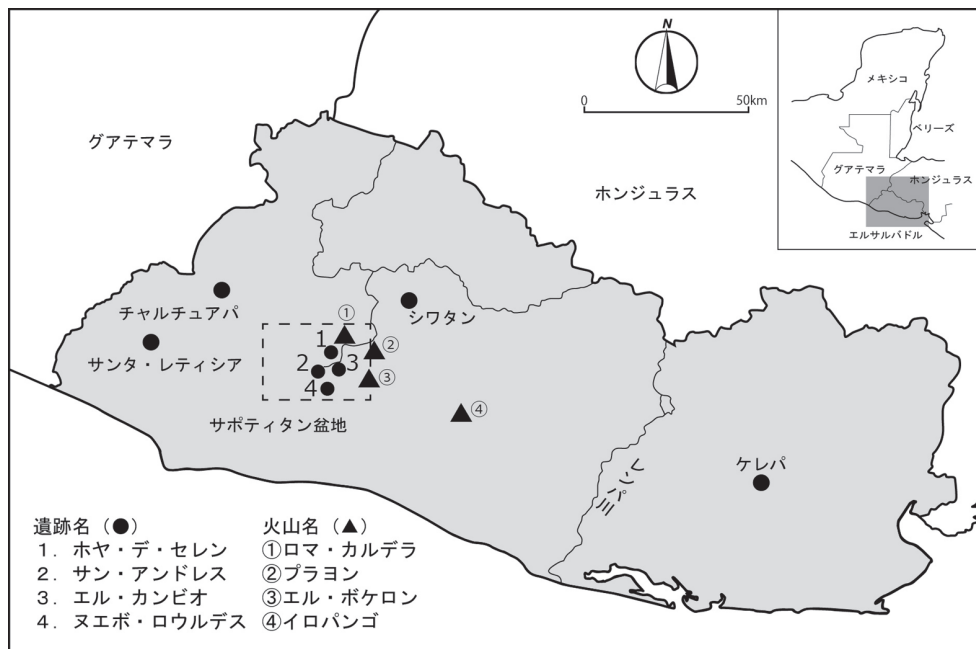


図 2 エルサルバドル遺跡地図 (筆者作成)

がある。さらに「中米のポンペイ」と称されるホヤ・デ・セレン遺跡、マヤ諸都市との交流が示唆されている古典期後期の中心センターであったサン・アンドレス遺跡、先古典期後期のマウンド群を有するエル・カンビオ遺跡、複数の墓と大量の土器片が出土しているヌエボ・ロウルデス遺跡など、様々な時期の異なる規模や性格を有した遺跡が存在している。これらの遺跡において複数の火山灰が確認できることは、火山灰を指標として相対編年を作りやすい環境であるということを示している。しかし広域踏査と時期がほぼ限定される 2 遺跡（エル・カンビオ遺跡、ホ・デ・セレン遺跡）の発掘資料のみに基づいていることや、イロパンゴ火山やロマ・カルデラ火山の噴火年代の議論、サポティタン盆地における年代測定データの少なさも加味すれば、サポティタン盆地の編年研究は途上といつてよい。

本稿では、複数の火山灰層の堆積が良好にみられるサン・アンドレス遺跡とエル・カンビオ遺跡の発掘調査データにもとづき、まず火山灰層と土器資料を拠り所として相対編年の構築から始めることにしたい。

2-3. 分析手法

サポティタン盆地の相対編年を構築するにあたっては、広域に分布する火山灰を用いたテフクロノロジーと編年研究で最も重要な考古資料である土器の分析を組み合わせる。さらに火山灰前後の土器組成の変化と建築活動などに着目し、サポティタン盆地の社会過程の復元を試みることにする。

2-3.1) テフクロノロジー

サポティタン盆地では、コアテペケ火山、イロパンゴ火山、ロマ・カルデラ火山、エル・ボケロン火山、エル・プラヨン火山の噴火を起源とする少なくとも 5 つの広域分布火山灰を確認することができる^(註3)。このうち噴火年代が前 77000~55000 年と想定されるコアテペケ火山と 1658 年に噴火したエル・プラヨン火山を除く、3 つの火山噴火が先スペイン時代の社会に大小の影響を与えた。ここでは各火山の噴火年代や火山灰の特徴や分布範囲について概略しておく（図 2）。

① イロパンゴ火山：首都サンサルバドルの東部に位置する火山で、現在、火口は南北約 8km、東西約 11km のカルデラ湖となっている。少なくとも 4 回の噴火記録がある [Chávez et al. 2012]。確認できる火山灰は、白色を呈していることから *Tierra Blanca*（＝白い土）と呼ばれ、噴火年代の古い順に TB4、TB3、TB2、TBJ と称されている。このうち最も年代の新しい火山灰を *Tierra Blanca Joven*（以下、略して TBJ）という。この TBJ を噴出した噴火は、新大陸では完新世最大規模と評されており、火口付近のみならず、10000km² を超す範囲に火山灰が降下した [Dull et al. 2001]。詳細は別稿に譲るが [Ichikawa 2016]、イロパンゴ火山の噴火年代とインパクトの問題は依然として議論がわかれるところである。ここでは筆者らの見解について簡単にまとめておきたい。

まず年代については、①後 260±114 年 [Sheets 1983]、②後 408 (429) 536 年 [Dull et al. 2001]、③後 535 年 [Dull et al. 2010] という三つの年代が主に議論の対象となっている。いずれも炭素 14 年代測定を用いている。ただし、大きな問題として、得られる炭素年代データが較正曲線の平坦な時期にあたるため、暦年代が絞きれない点が挙げられる。近年の年代測定結果は、常に後 400~550 年、すなわち②・③に相当する。筆者らは土器タイプや建築活動の様相、火山灰層前後でテオティワカン系の遺物・遺構^(註4)が出土することを根拠として、イロパンゴ火山の噴火年代を後 400~450 年頃と想定している [Ichikawa 2016:31]。

次に噴火のインパクトについては、大きく 2 つの立場がある。一つは、世界的な気候変動をも促すほどの巨大なインパクトを古代社会に与えたと想定し、火口付近のみならず、現在のエルサルバドル一体で社会が崩壊

または大きく衰退したとする立場である [e.g. Dull et al. 2010; Sheets 2009]。もう一つは、たしかに巨大なインパクトを与えたに違いないが、火口からの距離や方角次第ではインパクトが考えられているよりも小さく、一時的な避難はあったとはいえ噴火後も継続的に同じ社会集団が生活を営むとする立場である [e.g. Demarest 1988; Ichikawa 2016]。筆者らは後者の立場に立つが、この問題を明らかにするには、火山灰との層位的関係が良好で、火口からの距離、遺跡の性格が異なる複数遺跡の調査に基づき判断すべきである。

② ロマ・カルデラ火山：エルサルバドル中央部サポティタン盆地に位置する。この火山からの噴出物によって埋没したホヤ・デ・セレン遺跡は火口より南約 700m に位置している。当初、噴火年代は後 590±60 年とされていた。しかし、最新の校正曲線による既存データ [Sheets 1983] の再校正や Copador をはじめとする多彩色土器を基準にするならば、噴火時期は後 650 年頃が妥当と考えられる [Ichikawa et al. 2015; McKee 2007]。同噴火による火山灰は 10~20km² という比較的狭い範囲に堆積し、当該地域社会への影響はさほど大きくなかったと想定されている [Sheets 2007:78]。ホヤ・デ・セレン遺跡、エル・カンビオ遺跡までは降灰が確認されているが、火口より南約 6km に位置するサン・アンドレス遺跡では確認できていない。

③ エル・ボケロン火山：首都サンサルバドルの北西に位置するサンサルバドル火山群を構成する一つの火山である。火山灰は火口から約 300km² の範囲に降下したとされる。火山灰層直下から採取された 3 点の木片試料の炭素 14 年代測定の結果、噴火年代は後 964-1040 年と想定されている [Ferrés et al. 2011:842]。この噴火を起源とする堆積物は「Toba San Andrés」と現地では称されているが、火山との対応関係を容易にするため本稿では「エル・ボケロン火山灰」と呼称する。火山灰は灰褐色を呈し、非常に硬質であることから、堆積層は薄くとも農耕に大きな影響を与えたと想定されている [Sheets 2007:80]。ただし、噴火と社会の盛衰との因果関係については、十分に調査研究が行き届いていない点を考慮する必要がある [Sheets 1999:48]。

2-3.2) 土器分析

本稿では、上記の火山灰の堆積が良好な状態で確認することのできるサン・アンドレス遺跡とエル・カンビオ遺跡の発掘調査で出土した土器資料を素材とする。さらに、分析では先行研究との極端な乖離を避けるため、研究対象地域で主に使用されてきた既存の土器分類を参照枠とする [Beaudry 1983, 2002; Fowler Jr. 1981; Sharer 1978; Wilson 2013]。いずれもタイプ・バラエティ分類法に基づくものである。

土器分析においては、土器タイプやバラエティまで細分が可能なもの、あるいは細分が有用と考えられるものは細分しているが、基本的には土器グループを大きな分類上の単位としている。編年構築にあたっては、器形、装飾、胎土、表面調整など土器には多様な属性のうち、「器形」と「装飾」に主に着目し、その通時的変化を把握することにした。それは単に特徴が把握しやすいという分類作業上の理由だけではない。「器形」は一般的には土器の機能・用途を反映するとされるが、往時の生活様式や身体技法をも反映しているともされる [Rice 1987; Shepard 1956: 224; Skibo 2013:27-36]。したがって、器形の変化を追求することができれば、そうした生活様式や身体技法の通時的な変化も追える可能性がある。また「装飾」は社会集団が有するアイデンティティ、伝統、象徴性などが可視化されるものであり、交易や外来集団との関係性を捉えるには有効な属性でもある [Rice 1987; Wobst 1977]。

本稿では、上述したように火山灰を鍵層としながら土器を分析していくが、墓や住居などの遺構にともなう原位置出土の土器資料ではないため、後世の諸活動による攪乱などによって、上層においても下層で製作され

た土器片が含まれるという問題はある。したがって、新たな土器グループや特徴がいつから出現するのかという点に特に注視しながら、以下、出土土器について記載していくことにする。

3. サン・アンドレス遺跡の土器

3-1. サン・アンドレス遺跡の概要と調査史概略

3-1. 1) サン・アンドレス遺跡の概要

サン・アンドレス遺跡は、サポティタン盆地のほぼ中央部、現在の行政区分としてはラ・リベルタ県シウダ・アルセ市に位置する。イロパング火山の火口からは西約 55km、ロマ・カルデラ火山の火口からは南約 6km、エル・ボケロン火山の火口からは西約 15km の距離に位置する（図2）。

サン・アンドレス遺跡はサポティタン盆地における古典期後期の政治・宗教・経済の中心センターと考えられている [Boggs 1943]。遺跡は主に二つの建造物群グループに分かれる（図3）。一つは、1〜4号建造物や南広場で構成されるアクロポリスと7号建造物で構成されるグループである。もう一つは、北広場を中心に4基の長方形建造物、凝灰岩ブロックで築造されたB号建造物、遺跡内最大規模（基壇部で南北約80m、東西約90m、高さ約7m）を有しその外観から「カンパーナ（釣鐘型）」と称される5号建造物で構成されるグループである。本稿では二つのグループを象徴する特徴から、前者を「アクロポリス・グループ」、後者を「カンパーナ・グループ」とする。

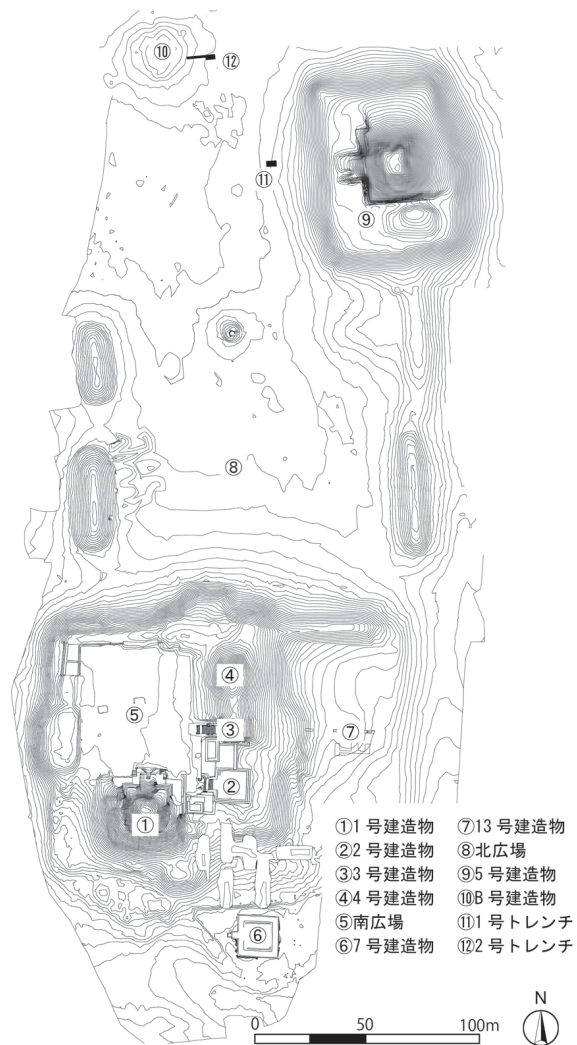


図3 サン・アンドレス遺跡平面図（筆者作成）

3-1.2) サン・アンドレス遺跡の調査史概略

サン・アンドレス遺跡における本格的な考古学調査の嚆矢は、J・ディミットらによる 1940-1941 年に実施された調査である [Boggs 1943; Mason 1941a, 1941b; Ries 1940]。アクロポリス・グループを大々的に調査し、建造物の主たる建築材がアドベであること、石彫、ヒスイ製品、多彩色土器などの多くの考古遺物から主に古典期後期に位置づけられるようになった。また、調査が実施された当時は詳細に述べられていないが、アクロポリスの建築断面図に、エル・ボケロン火山灰とイロパンゴ火山灰と思われる二つの火山灰が確認できる [Boggs 1943]。

1977 年には 7 号建造物が調査された。西側正面階段下より、マヤ地域との関係を強く示唆し、支配者を形象したと考えられるエキセントリック形石器、スポンディルス貝、エイの棘、多彩色土器などが供物として発見された [Mejía 1977, 1984]。7 号建造物は、遺跡内で唯一の切石積みの建築技法を有する建造物である。

1990 年代に入ると、エル・ブラヨン火山の噴火によって埋没した植民地時代の藍染工房址の調査と併行して 1978 年に実施された発掘調査の未整理土器資料が分析され、チャルチュアバ遺跡編年をもとに先古典期中期から後古典期前期までの土器が同定されている^(註5) [Amaroli 1996]。1990 年代の調査で特筆に値するのは 5 号建造物と B 号建造物の調査である [Begley et al. 1996, 1997]。この調査では、サン・アンドレス遺跡の文化史復元、周縁地域の文化的特性の抽出が目的にかかげられ、ここでも先古典期中期から後古典期前期までの土器が確認されている [Begley et al. 1997]。この変遷では、古典期前期の土器が出土しないという指摘が注目される。ただし、この背景をイロパンゴ火山の噴火に求めている点に注意しておきたい。その他、アクロポリスの周囲の調査が実施され、現時点ではサン・アンドレス遺跡唯一の炭化物の年代測定データ 2 点が得られている^(註6) [McKee 2007:296]。

2011 年から 2013 年にかけて、エルサルバドル大統領府文化庁文化遺産局考古課（以下、エ国考古課）が中心となり、三次元遺跡地図の作製、アクロポリスの東側に位置する 13 号建造物の発掘調査、1・2 号建造物の修復保存作業を実施した [Camacho y Díaz 2014; Díaz et al. 2013]。13 号建造物の発掘調査では、建造物とエル・ボケロン火山灰との間に厚い堆積物があること、建造物の壁面が崩落していることなどを根拠とし、アクロポリスがエル・ボケロン火山の噴火以前に既に機能を停止していた可能性を指摘している [Camacho y Díaz 2014; Díaz et al. 2013]。

以上、断続的ではあるが、サン・アンドレス遺跡の調査史は長い。しかし、遺跡の歴史を語る上で欠かせない編年は、依然として大まかで他遺跡や地域との比較研究を行える状態にはない。1990 年代の調査によって先古典期中期から後古典期前期に該当する土器の存在が一つの鍵となる [Begley et al. 1997]。しかし、調査報告書には肝心の論拠となる土器データの記述が僅かであることや、近年におけるイロパンゴ火山の噴火年代に関する議論も考慮すれば、遺跡の編年は再考を要しよう。

3-2. 各時期の土器の特徴

3-2.1) 分析資料

本稿で用いる土器資料は、エ国考古課による 2011-2012 年の発掘調査、筆者らによる 2015 年の発掘調査で出土したものである^(註7)。2011-2012 年はアクロポリス・グループの東側に位置する 13 号建造物の周辺、2015 年はカンパーナ・グループの 5 号建造物の基壇下西側と B 号建造物東側でトレンチ発掘を実施した。分析に使用した土器片は、口縁部を中心に分類が可能な資料 908 点である。

2011-2012 年の発掘調査ではエル・ボケロン火山灰が、2015 年の発掘調査ではエル・ボケロン火山灰とイロパ

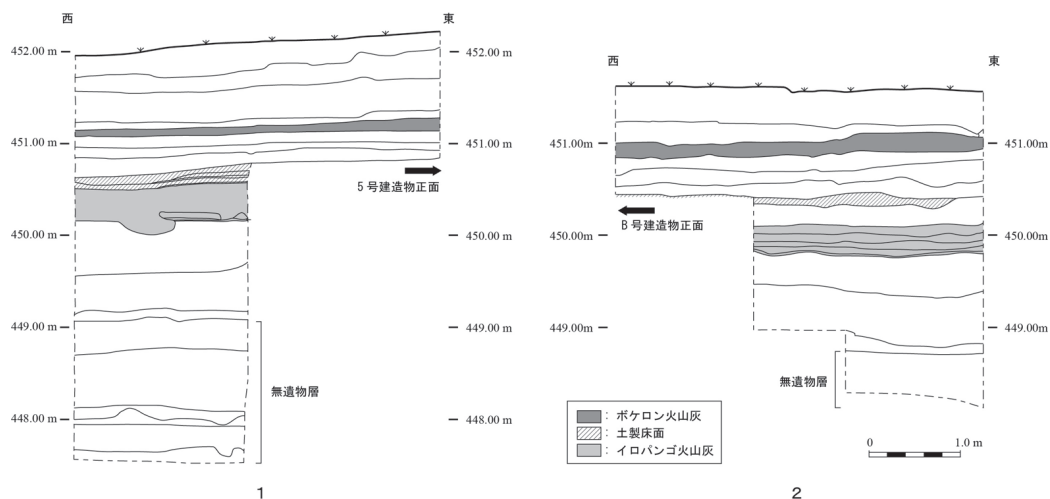


図4 サン・アンドレス遺跡1・2号トレンチ断面図

(1.1号トレンチ北側断面図、2.2号トレンチ北側断面図)

ンゴ火山灰が確認されている。これら2つの火山灰の検出状況は土器資料の年代的位置づけや歴史を考える上でも重要であることから、以下に詳述する。

まずエル・ボケロン火山灰は、サン・アンドレスの古典期後期の衰退期と関係する。2011-2012年、2015年の調査データに共通することは、古典期後期の最後の建造物がエル・ボケロン火山灰に直接覆われておらず、建造物と火山灰の間に別の堆積土層（おそらく風雨などによって浸食・流出したアドベや建造物内部の充填土に由来）が存在するという点である。2011-2012年の調査では、建造物が降灰以前に既に壊れていたことが分かっているが〔Díaz et al. 2013:346〕、これは建造物の崩落後からある程度の時間が経過した後に、エル・ボケロン火山の噴火が発生したことを示唆している。

次にイロパンゴ火山灰は、サン・アンドレスの発展の黎明期の様相と関係する。2015年の発掘調査では、2か所のトレンチ発掘を行っているが、イロパンゴ火山灰の出土状況が両者で異なる点が興味深い（図4）。5号建造物の基壇下西側に設定した1号トレンチでは、厚さ約40cmのイロパンゴ火山灰一次堆積層の直上に床面が形成されている。床面は5層に分層することができることから、複数回の床の張り替えがあったことが示唆される。一方のB号建造物東側に設定した2号トレンチでは、厚さ約40cmのイロパンゴ火山灰一次堆積層と床面の間に厚さ約20cmの茶褐色土層が確認できた。床は1号トレンチで検出された床と比較するとやや粗いが、黄褐色粘土と細かい黒色軽石という同じ材料が用いられているので、同時期の所産と考えられる。検出状況からすると建造に伴う整地のための盛り土の可能性や、B号建造物よりも5号建造物の方がイロパンゴ火山の噴火後に早くに建設された可能性などが想定される。

3-2.2) サン・アンドレス遺跡におけるイロパンゴ火山灰より下層出土の土器

イロパンゴ火山灰より下層から出土した土器（ $n=490$ ）は17の土器グループに分類することができる。その中でも代表的な土器グループとしては、Mizata、Jicalapa、Nohualco、Lolotique、Huascachaが挙げられる（図5）。特徴的な器形としては、器壁がやや厚く、頸部が大きく外反する短頸壺が目立ち、他には胴部が弓状に外反、

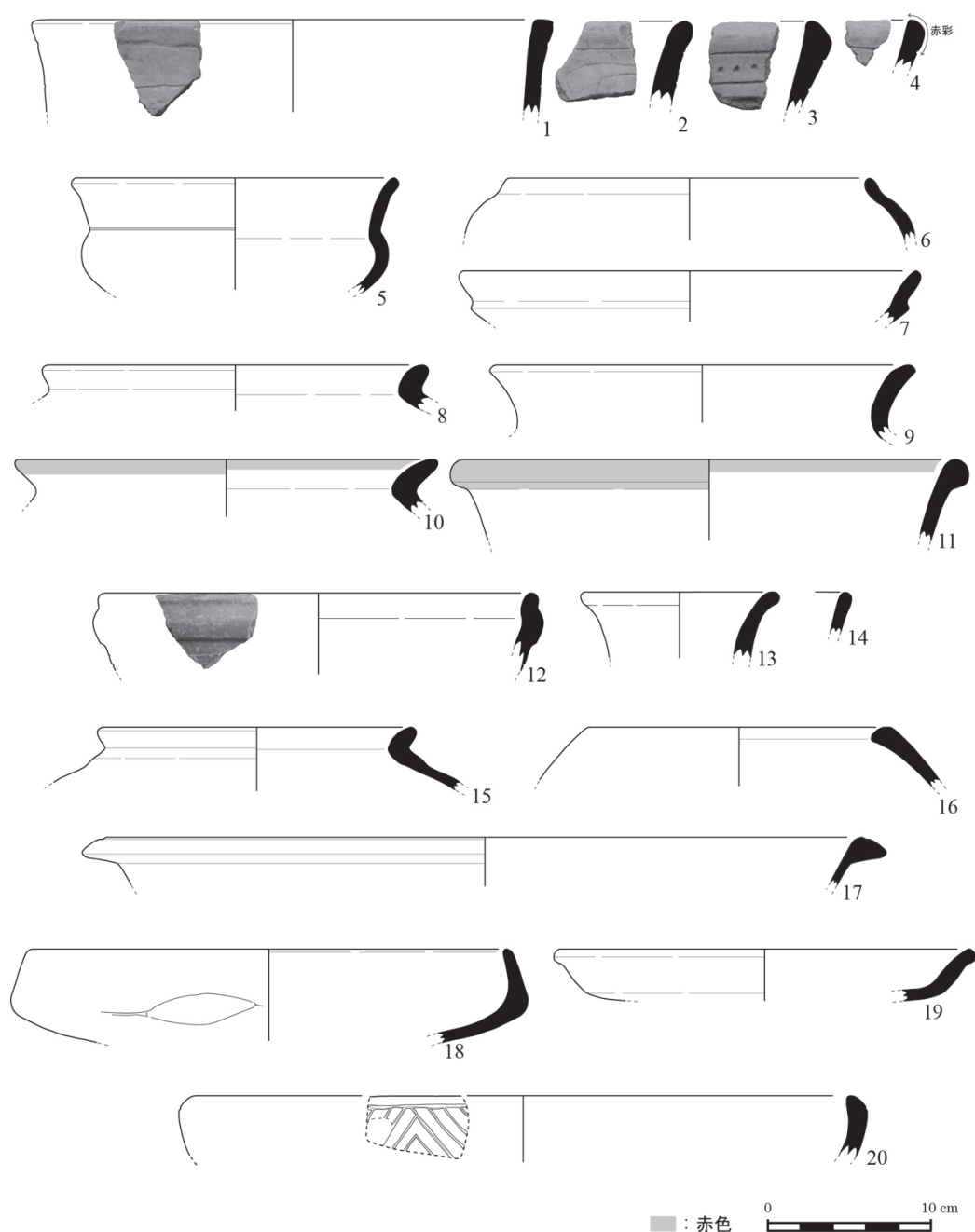


図5 サン・アンドレス遺跡におけるイロパンゴ火山灰より下層出土の主な土器

(1. Mizata [Conchilo], 2. Mizata [Conchilo Complex], 3. Mizata [La Joya], 4. Mizata [Conchailo Ronco Red], 5-7. Jicalapa, 8-9. Nohualco [Unslipped], 10-11. Nohualco [Zanjon Painted], 12-14. Lolotique, 15-16. Huascaha, 17. Olocuitla, 18. Puxtla, 19. Izalco, 20. Coquiama)

もしくは口縁端部が平坦な浅鉢などがある。無装飾の土器も多いが、装飾は刻線、口縁部への赤彩帯、そしてウスルタン文が特徴的である。これらの土器は、先行研究 [Beaudry 1983; Inomata et al. 2014; Sharer 1978] によれば、先古典期中期後半から先古典期後期（前 600-後 100 年）に位置づけられる土器である。ただし、El Congo、Jocote、Lamatepeque、Coquiama といった先古典期中期前半（前 1000-600 年）に特徴的とされるやや鋭角な刻線をもつ土器も僅かだが出土している（図 5.20）。今後の発掘調査でこれらの土器に層位的な違いが見いだされれば、サン・アンドレスにおける最初期の居住はより古くに位置づけられる可能性はある。ここでは出土土器の大半を占める先古典期中期後半から先古典期後期に位置づけられる土器の諸特徴について詳述する。

Mizata は、素地で表面は平滑仕上げ、器壁が厚く、焼成後のやや太めの刻線と列点文の装飾が特徴的である。器形は鉢、円筒がある。刻線は口縁部外面に一条もしくは二条の水平線が基本で（図 5.1）、加えて垂直線や鋸歯文などが描かれるタイプ（図 5.2）、刻線と列点文の組み合わせをもつタイプがある（図 5.3）。口縁部や刻線によって区画された部分に赤彩が施されるタイプもある（図 5.4）。

Jicalapa は、クリーム色化粧土の上にオレンジ色化粧土という二重化粧土が施された土器で、ウスルタン文や刻線・凹線が施されているのが特徴である（図 5.5-7）。器形は胴部が緩く外反または外傾する浅鉢、胴部がやや丸みをおび口縁部が垂直に立ち上がる鉢が主である。ウスルタン文は併行する斜線や曲線で土器の内外面に施されるが、Izalco と比較すると表面調整や装飾という点で洗練さに欠ける。

Nohualco は、素地で表面は平滑仕上げ、口縁部が「く」の字状に外反する、または肥厚した口縁部をもつ（図 5.8-11）。口縁部内外面に赤彩が施されるタイプも頻出する（図 5.9-10）。

Lolotique は、クリーム地の胎土で表面に濃い赤色化粧土が施され、細目の刻線が特徴的な土器である（図 5.12-14）。基本的には薄手の器壁だが、厚手の資料も散見される。分析に用いた資料では口縁部資料が少ないため詳細は不明だが、先行研究にしたがえば、器形は鉢・浅鉢・壺である [Sharer 1978 vol.III:149]。装飾の刻線は単純な直線だけでなく、鋸歯文もあるが、チャルチュアバ遺跡でみられるカエルなどのモチーフはみられない。

Huacaha は、ややオレンジがかかった茶褐色の胎土、素地で表面は平滑仕上げ、口縁部が強く外反する短頸壺と無頸壺（テコマテ）が特徴的である（図 5.15-16）。器形は壺が基本で厚手の把手が付く場合もある。装飾では、口縁部外面に一条の刻線や列点文が施されるタイプもある。

その他の土器としては、Olocuitla、Tepecoyo、Puxtla、Izalco といったオレンジ色化粧土にウスルタン文様が施された土器グループが目立つ（図 5.17-19）。これらのグループの基本器形は浅鉢である。胴部が内湾するものもあるが、胴部が緩く外傾し口縁端部がやや肥厚するタイプが特徴的である。

なお興味深いことは、乳房状脚部（マミフォルメ）、赤色帯とウスルタン文様の装飾の組み合わせ、高台、オレンジ地厚手土器（土器グループとしては Aguacate）が出土しない点である。これらの器形や装飾は先古典期終末期から古典期前期前半（後 100-後 450 年）に特徴的なものであるが、現時点では確認できていない。

3-2.3) イロパング火山灰より上層、エル・ボケロン火山灰より下層出土の土器

イロパング火山の噴火以後からエル・ボケロン火山の噴火以前のコンテキストは、層位的に 3 つのコンテキスト、①「イロパング火山灰と床面の中間層」、②「床内埋土」、そして③「床面とエル・ボケロン火山灰の中間層」に分けられる。

調査範囲が小規模であることにも起因していると思われるが、最初の 2 つのコンテキストにおける土器出土量は合計 10 点と極めて少なく、そのうち分類が可能であった資料は 8 点である。イロパング火山灰と床面の中

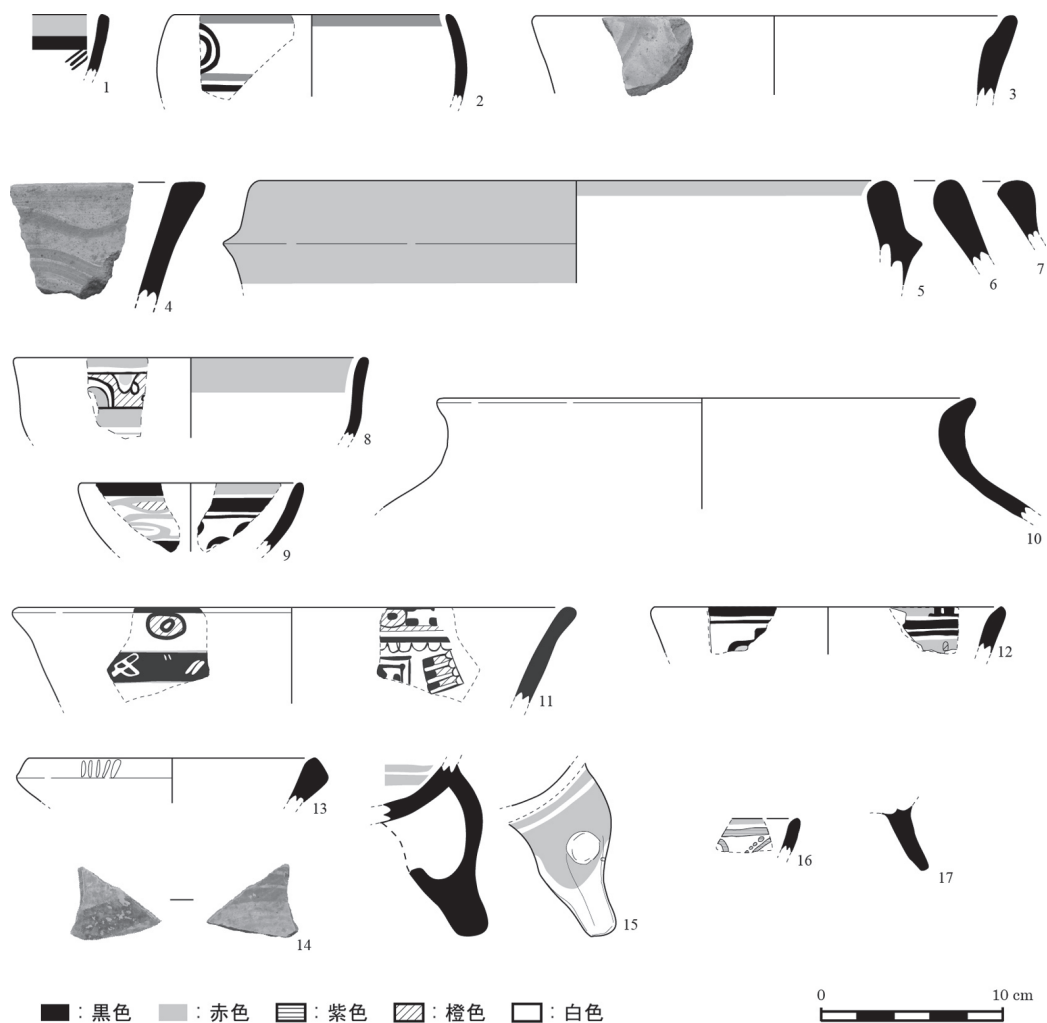


図6 イロパンゴ火山より上層、エル・ポケロン火山灰より下層出土の主な土器

(1-2. Gualpopa, 3-4. Guazapa [Majagual], 5-7. Guazapa [Chorros], 8-9. Copador, 10. Balam, 11. Campana, 12. Chancala, 13. Guarumal, 14. Arambala, 15. Nicoya, 16. Machacal, 17. 高台破片[グループ不明])

間層では Guazapa のみ、つづく床内埋土では Guazapa と Gualpopa のみが出土している。Guazapa は、厚手の器壁をもち、茶褐色地の素地にクリーム色の化粧土が施され、さらにその化粧土の一部が削られて文様をなす「化粧土削り文 (Engobe Raspada)」に特徴づけられる。後述するように Guazapa は細分が可能であるが、摩滅のため細分は困難であった。Gualpopa はクリーム色の胎土で、オレンジ色の化粧土が施され、その上に赤・黒色で幾何学的な彩色文様が描かれている。口縁端部の内外面に赤帯彩色が施される。幾何学的な文様も内外面に施されるが、外面の方がより複雑な文様帯であることが多い (図 6.1-2)。基本器形は、半球形の浅鉢だが、先行研究では円筒形も確認している [市川 2014]。

上述の 2 つの土器グループはイロパンゴ火山の噴火後に他の土器グループよりも早い時期から生産が開始さ

れたことが示唆される。これらの土器グループは、一般的には古典期後期の指標土器とされているが [Beaudry 1983; Wilson 2013]、チャルチュアバ遺跡編年においては、Guazapa は Vec 期 (後 200-400 年)、Gualpopa は Xocco 期 (後 400-600 年) にはその初現がみとめられる。これは、筆者によるチャルチュアバ遺跡における最新の発掘調査データによる土器編年研究の成果とも符号する [市川 2014]。したがって、他の土器グループよりも先行して出土することに矛盾はない。

つづく床面とエル・ボケロン火山灰の中間層になると土器の出土点数 (n=182) が一気に増加する。総数 19 グループに分類が可能であり、その中で代表的な土器グループとしては、Guazapa、Copador、Balam が挙げられる。器形では、器壁が厚く口縁部近くにフランジをもつ鉢、半球形の碗や胴部が弓状に外反する浅鉢がこの時期の特徴を示すものになる。装飾では化粧土削り文や多彩色が顕著となる。化粧土削り文は壺や大型の鉢にはほぼ限定され、多彩色は半球形の碗や浅鉢にはほぼ限定される。

Guazapa は、厚手の器壁と茶褐色地の素地にクリーム色の化粧土という基本属性をもとに、先行研究ではさらに 5 つのタイプに細分されている (図 6.3-7)。①化粧土削り文のみが施されたタイプ (Majagual)、②化粧土削り文が施された上に赤彩が施されるタイプ (Obraje)、③化粧土削り文が施されていないクリーム色の化粧土の上に赤色の化粧土が施されるタイプ (Chorros)、④単にクリーム色の化粧土が施されるタイプ (Cashal)、⑤化粧土削り文と赤彩が別々に施文されるタイプ (Miltitlan) である。ただし、今回確認したサン・アンドレス遺跡出土土器には Miltitlan は確認できなかった。特徴的な器形は、口縁部がやや内湾し、口縁部よりやや下の外面にフランジをもつ鉢や無頸・有頸壺がある。

Copador は、クリーム色の胎土に、オレンジ色の化粧土が施され、その上に赤・黒・オレンジ色で彩色文様が施される (図 6.8-9)。Gualpopa と似ているが、赤彩に赤鉄鉱が用いられている点、文様が疑似文字、デフォルメされた人物や動物など、具体的なデザインが施されている点が明らかに異なる。基本器形は半球形の碗や胴部が弓状に外反する浅鉢がある。先行研究ではエルサルバドル西部一帯とホンジュラス西部に位置するコパン遺跡とその周辺で多く出土すると報告されており、時期としては古典期後期の所産といわれている [Beaudry 1983; Sharer 1978 vol.III; Viel 1993]。サン・アンドレス遺跡では床面よりも上層からのみ出土する。

Balam は、赤褐色の胎土で、化粧土も装飾も施されていない簡素な土器である (図 6.10)。表面に刷毛目状の工具を用いた器面調整がみられる。器形は主に口縁部が外反する壺だが、その他に鉢がある。

床面とエル・ボケロン火山灰の中間層では、Gualpopa や Copador に加えて、少量ではあるが Campana、Chancala、Guamal、Arambama、Nicoya、Machacal といった豊富な多彩色土器が出土する点も特徴的である。

Campana は、オレンジがかったクリーム色の化粧土の上に、黒・オレンジ・赤色の彩色が施されている (図 6.11)。器形は脚付浅鉢が一般的で、彩色文様は幾何学的な直線・曲線の他に人物表現もみられる。

Chancala は、オレンジがかったクリーム色の化粧土の上に、黒と濃い赤色で抽象的な幾何学文が描かれている (図 6.12)。基本器形には半球形の碗や胴部が外傾する浅鉢がある [Wilson 2013]。

Guamal は褐色地で、とりわけ口縁部と胴部に赤彩が施され、その上に白色で直線やドットなどの彩色文様が施される (図 6.13)。基本器形は、壺である。

Arambama は、胎土がオレンジ褐色で、土器表面にはオレンジがかったクリーム色の化粧土に、赤や黒色で幾何学文やデフォルメされた人物や動物が描かれる (図 6.14)。残念ながら器形のわかる破片が本稿にかかわる調査では出土していないが、一般的に胴部が弓状に外反する浅鉢が多い [Sharer 1978 vol.III:175]。Copador や Gualpopa と類似するが、胎土や装飾に違いが認められるため区別できる。

Nicoya は、白色化粧土の上に、赤、黄色、黒色で抽象的な幾何学文が描かれている (図 6.15)。ニカラグア

やコスタリカにまたがるニコヤ半島にその起源が求められる土器である。器形は鉢、壺、円筒などあるが、三角錐形をした脚部や動物を形象した土器も特徴である [Sharer 1978 vol.III:72]。

Machacal は、オレンジ色の化粧土の上に、赤そして紫色の彩色装飾が特徴的である (図 6.16)。文様も他の多彩色土器とは異なり、ドットや渦巻き状のデザインが特徴的である。器形は浅鉢が主体で、高台付浅鉢もある [Sharer 1978 vol.III:70]。なお、土器グループの同定は困難だが、高台の破片がみつまっている (図 6.17)。

上記の多彩色土器の他に Chilanga や Sirama といった単色の彩色土器も各 1 点であるが出土している。Chilanga はクリーム地の胎土で、器面は丁寧な平滑仕上げが施され、その上に赤色で彩色文様が描かれている [Sharer 1978 vol.III:47]。先行研究では、直線や斜線の組み合わせによる幾何学文が彩色の主体である。オレンジがかった化粧土が施されている場合には、ウスルタン文も施文されている場合が多いが、ウスルタン文が前代より簡略化されている。器形は浅鉢が多く、高台がつくこともある。Sirama は、クリームがかった化粧土が施され、その上に赤彩が施される。胴部に施される赤彩は直線や曲線で構成されるが、線が太い点が特徴的である。ケレパ遺跡の Shila 期 (後 200-600 年) で確認されている [Andrews 1976]。

その他、Tazula、La Presa、El Pito といった土器グループが出土している。先行研究によれば、いずれも Vec 期から Payu 期 (後 200-900 年) に位置づけられる土器グループである。Tazula は、当該地域では珍しい黒色化粧土が施された土器であり、土器表面に磨き光沢が少し見られる。イロパング火山灰下層から既にみられる土器と報告されている [Beaudry 1983:167]。La Presa は、赤色の化粧土が特徴的で、器壁がやや厚く、開口の鉢形土器が目立つ [Beaudry 1983:172]。El Pito は、ピンク色の胎土にクリーム色の化粧土が施されているのが特徴的で、赤彩や刻線が施されているタイプもある [Beaudry 1983:170]。

3-2. 4) エル・ボケロン火山灰より上層出土の土器

エル・ボケロン火山灰より上層で出土する土器 (n=228) は総数 22 グループに分類が可能である。その中でとりわけ重要な土器グループが Jegen である。なぜなら、この土器グループは Mixteca-Puebla 様式との類似性が指摘されているからである [Amaroli and Bruhns 2013; Fowler Jr. 1981; Wilson 2013]。全体に赤色の化粧土が施

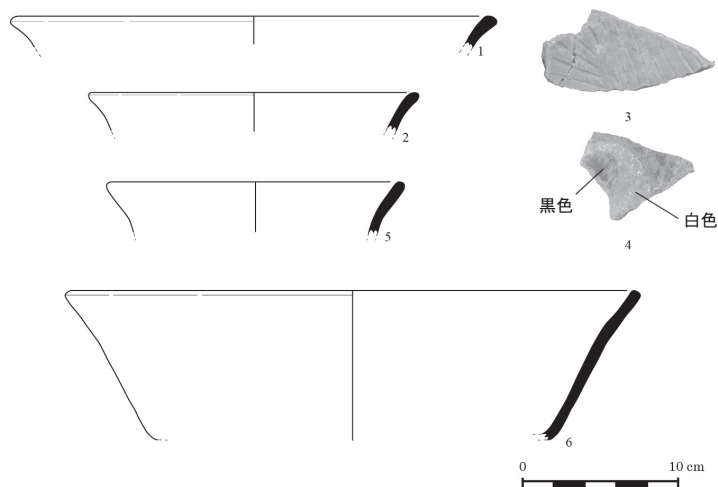


図7 エル・ボケロン火山灰より上層出土の主な土器

(1-2. Jegen, 3. Jegen の底部内面, 4. Jegen の内面彩色, 5. Chuquezate, 6. Sven)

され、内外面に黒・白またはオレンジの彩色が施されているのが特徴である (図 7.1-4)。基本的な器形はやや口縁が外反する浅鉢で細長の三脚もしくは高台が付く。内面底部付近には格子状に刻線が施されている場合もある。これらの土器がエル・ボケロン火山灰より上層からのみ出土するという事実は、メキシコ中央高地もしくは南部地域からの文化的影響や人々の移住等があるとすれば、エル・ボ

ケロン火山の噴火後である蓋然性が高いことを示している。

その他、エル・ボケロン火山灰より上層のみから出土する土器グループとして、*Chunquezate*、*Sven*、*Falar*、*Bronco*、*Chilama*、*Barracuda* がそれぞれ1～3点出土している。

Chunquezate と *Sven* は、いずれも化粧土の施されていない簡素な土器である。*Chunquezate* は口縁部と胴部を結ぶ大きい把手や土器内外面につく刷毛目状の調整痕が特徴的である（図 7.5）。*Sven* は胴部に水平につけられた把手や円錐形の脚部が特徴的な土器である（図 7.6）。両者は先行研究において後古典期に属すると考えられており [Sharer 1978 vol. III:61; Wilson 2013]、エル・ボケロン火山の噴火後に現れる土器として矛盾はない。

Falar、*Bronco*、*Chilama* はいずれも多彩色土器であり、装飾・器形ともにエル・ボケロン火山灰より下層の土器と特徴を共有する。これらの土器は先行研究 [Beaudry 1983:173] において、エル・ボケロン火山灰よりも下層、すなわち古典期後期の所産と考えられており、後世の諸活動による混入の可能性も想定される。

その他、*Guazapa*、*Gualpopa*、*Copador*、*El Pito* といった土器グループも頻出している。これらはエル・ボケロン火山灰より下層から既に製作が開始されている土器である。エル・ボケロン火山の噴火後も継続的に製作されていたとも考えられるが、後世の撓乱などの可能性も十分にありうる^(註8)。

3-2.5) 小結

サン・アンドレス遺跡の土器の通時的変化について、その特徴を6点列挙し、小結としておきたい。

- ① イロパango火山灰より下層から出土する土器は、先古典期中期前半に位置づけられる土器もみられるが、先古典期中期後半から後期の特徴を有する土器で主に構成されている。*Mizata*、*Nohualco*、*Huascacha* といったやや簡素な土器が顕著で、無頸壺・短頸壺または鉢といった器形が大半を占める。浅鉢は胴部が内湾するもの、胴部が緩く外傾もしくは弓状に外反するもの、さらに口縁端部に平坦面をもつものがある。装飾はやや粗さの残る刻線や列点文、口縁端部に赤彩帯、そしてウスルタン文が特徴的である。ただし、ウスルタン文様をもつ土器は顕著ではなく、またチャルチュアパ遺跡でみられる黒色化粧土系の土器（例えば、*Pino*）がみられない点は、サポティタン盆地の土器伝統の地域性を考える上で興味深い。
- ② イロパango火山灰前後のコンテクストにおいて、先古典期終末期から古典期前期の特徴といえる乳房状脚部、オレンジ地厚手土器（*Aguate*）、赤彩帯とウスルタン文の装飾セットがみられない。ただし、高台とクリーム地に幾何学的な赤彩文が施される *Chilanga* が出土するが、小片かつ極少量だが出土している。
- ③ イロパango火山灰前後で土器組成が大きく変わる。火山灰前に出土していた土器がほとんど出土しない。
- ④ イロパango火山灰より上層で現れるのは化粧土削り文が特徴的な *Guazapa*、多彩色装飾が特徴である *Gualpopa* である。
- ⑤ イロパango火山灰より上層、エル・ボケロン火山灰より下層の土器では、*Guazapa* の多様化がみられる。また、*Copador*、*Gualpopa*、*Campana* といった多彩色装飾の施された土器も種類が豊富になる。器形は *Guazapa* に代表される器壁がやや厚めで、口縁部よりやや下にフランジをもつ鉢や無頸・有頸壺が顕著である。このような *Guazapa* の器形・装飾の多様性はチャルチュアパではみとめられない。浅鉢は多彩色装飾が施しやすいように器面が滑らかで、胴部がやや外傾するか、もしくはほぼ直立する器形、あるいは半球形の椀が目立つ。エル・ボケロン火山の噴火以前にみられる簡素な壺には、*Balam* などの土器グループがある。
- ⑥ エル・ボケロン火山灰より上層では、*Jegen* というメキシコ中央高地または南部地域にその起源が求められる土器グループが出現する。エル・ボケロン噴火以前に顕著であった多彩色装飾を施す土器文化は衰退し、化粧土のない簡素な土器が顕著となる。

4. エル・カンビオ遺跡の土器

4-1. エル・カンビオ遺跡の概要と調査史概略

4-1.1) エル・カンビオ遺跡の概要

エル・カンビオ遺跡はサボティタン盆地の北東部に位置し、盆地内を流れるスシオ川の右岸に立地し、標高は約450mである。イロパンゴ火山の火口からは西約37km、ロマ・カルデラ火山の火口からは南約4km、エル・ボケロン火山の火口からは西約11kmの距離に位置している。遺跡は5つのマウンドで構成されており、最も大きいマウンド1は遺跡の北に位置し、高さ約12mを有する(図8)。その他のマウンドはいずれも高さ2m以下である。これらのマウンドはおそらく全て土製建造物で、出土遺物とイロパンゴ火山灰より下層で建造物の立ち上がりなどが見つかっていることから、先古典期後期に属する[Shibata y Morán 2009]。マウンド1・2に囲まれた広場と思われる範囲には広範囲に畝状遺構が、マウンドの北西では墓が複数見つかっている。これらのマウンド群や墓を根拠として、エル・カンビオ遺跡は先古典期におけるサボティタン盆地の中心的なセンターと想定されている[Castillo 2007; Sheets 1983; Shibata y Morán 2009]。

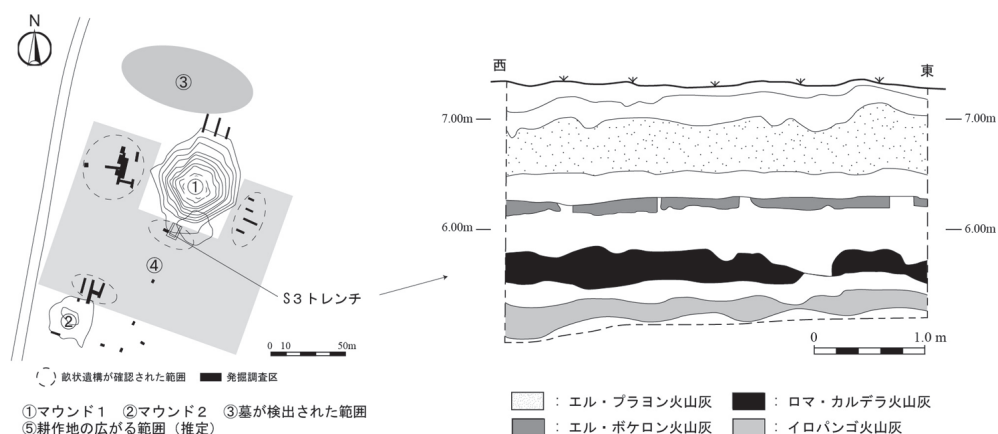


図8 エル・カンビオ遺跡平面図と基本層位図

(Shibata y Morán 2009 をもとに作成、基本層位図の標高は任意)

4-1.2) エル・カンビオ遺跡の調査史概略

エル・カンビオ遺跡における調査は、1975-1980 年にかけて実施されたコロラド大学による「原古典期プロジェクト」を嚆矢とする。発掘調査は2×2mの試掘坑が22箇所を設定され、自然分層もしくは20cmごとの人工分層によって発掘が進められ、各層の遺物が回収された。また、盆地の南北に通る幹線道路脇に露出している断面を精査することで、遺跡全体の基本層序を決定した。分析の対象となった土器が出土した層はI層とG層、E層である。I層はイロパンゴ火山灰層(H層)によって覆われている。G層はイロパンゴ火山灰層よりも上層であり、エル・ボケロン火山灰(F層)によって覆われている。E層はエル・ボケロン火山灰より上層である。これらの火山灰層を鍵層として利用し、各層の出土土器を、チャルチュアパ遺跡編年を参照枠としながら分類し、おおまかな土器の変遷を示した[Beaudry 1983]。

2002～2009 年にかけては宅地造成などにかかわる緊急発掘調査が実施された [Castillo 2007; Chávez 2009; González 2006; Shibata y Morán 2009]。発掘調査の結果、イロパンゴ火山灰より下層から墓、建造物や畝状遺構が検出された他、イロパンゴ火山灰より上層で多彩色土器や玄武岩の大型剥片石器の埋納遺構も見つかっている。

4-2. 各時期の土器の特徴

4-2. 1) 分析資料

本稿で扱う土器資料は、エ国考古課による 2009 年の発掘調査で出土したものである。口縁部資料を中心に 552 点を分析した。エル・カンビオ遺跡では下からイロパンゴ火山灰、ロマ・カルデラ火山灰、エル・ボケロン火山灰、エル・ブラヨン火山灰の 4 つの火山灰層が検出されている (図 8)。

分析対象となる土器は各火山灰層の間層から出土したものである。以下、各層から出土した土器について詳述するが、出土する土器グループはサン・アンドレス遺跡とほぼ同じであるため、既述の土器グループに関しては相違点を中心に明示することとし、エル・カンビオ遺跡出土土器にみられる器形と装飾の通時的変化に着目しながら、詳述していくことにする。

4-2. 2) エル・カンビオ遺跡におけるイロパンゴ火山灰より下層出土の土器

イロパンゴ火山灰より下層で出土する土器 (n = 110) は 9 つの土器グループに分類することができる。代表的な土器グループとしては Mizata, Nohualco, Huascha, さらに Jicalapa や Olocuitla が挙げられる (図 9.1-8)。特筆に値するのは、サン・アンドレス遺跡ではイロパンゴ火山灰より上層から出土し始める Guazapa, La Presa Gualpopa がイロパンゴ火山灰より下層から出土している点である (図 9.9-13)。サン・アンドレス遺跡では確認されていない、器面には赤もしくは暗赤色の化粧土に丁寧なミガキ調整が施される Gumero という土器グループも出土している (図 9.14)。特徴的な器形としては、無頸壺、器壁がやや厚く頸部が大きく外反する短頸壺、深鉢、浅鉢が主体を成す。浅鉢の形はバラエティに富むが、胴部が外傾、または弓状に外反もしくは内湾するものが目立ち、これらは Jicalapa や Olocuitla といったオレンジ色化粧土の土器にその多様性が認められる。イロパンゴ火山の噴火以前の土器は無装飾の土器で主に構成されるが、刻線、口縁端部に施される赤彩帯、ウスルタン文、そして化粧土削り文が特徴的な装飾技法として列挙できる。

Guazapa は、少なくとも 5 つのタイプがあることを上述したが、イロパンゴ火山の噴火以前にはクリーム色化粧土の上に、口縁端部の内側から土器外面にかけて赤彩が施されるタイプ (Chorros)、文様が平行線もしくは波状線からなる化粧土削り文が施されるタイプ (Majagual) という 2 つのタイプが他のタイプよりも先行することが明らかとなった点も重要であろう。また、口縁部が緩やかに内傾し口縁部よりやや下の外面にフランジをもつ無頸壺、口縁部が緩やかに外湾しながら立ち上がる短頸壺など後代に典型的な器形が既に存在している点も見逃せない。

La Presa は、この土器グループに施される赤色の化粧土は Guazapa に施される化粧土と類似していることから、Guazapa から La Presa へという时期的変化が想定されている [Wilson 2013]。しかし、時期差というよりも同時期の彩色技術が別のタイプの土器にも投影されたという捉え方も可能となろう。

Gualpopa は、オレンジがかかったクリーム色の化粧土に黒・赤色の多彩色文様であることも重要だが、ここでは半球形の碗という器形も重要である。後代の多彩色土器の特徴とされる祖型がイロパンゴ火山の噴火以前に既に存在することを示すからである。

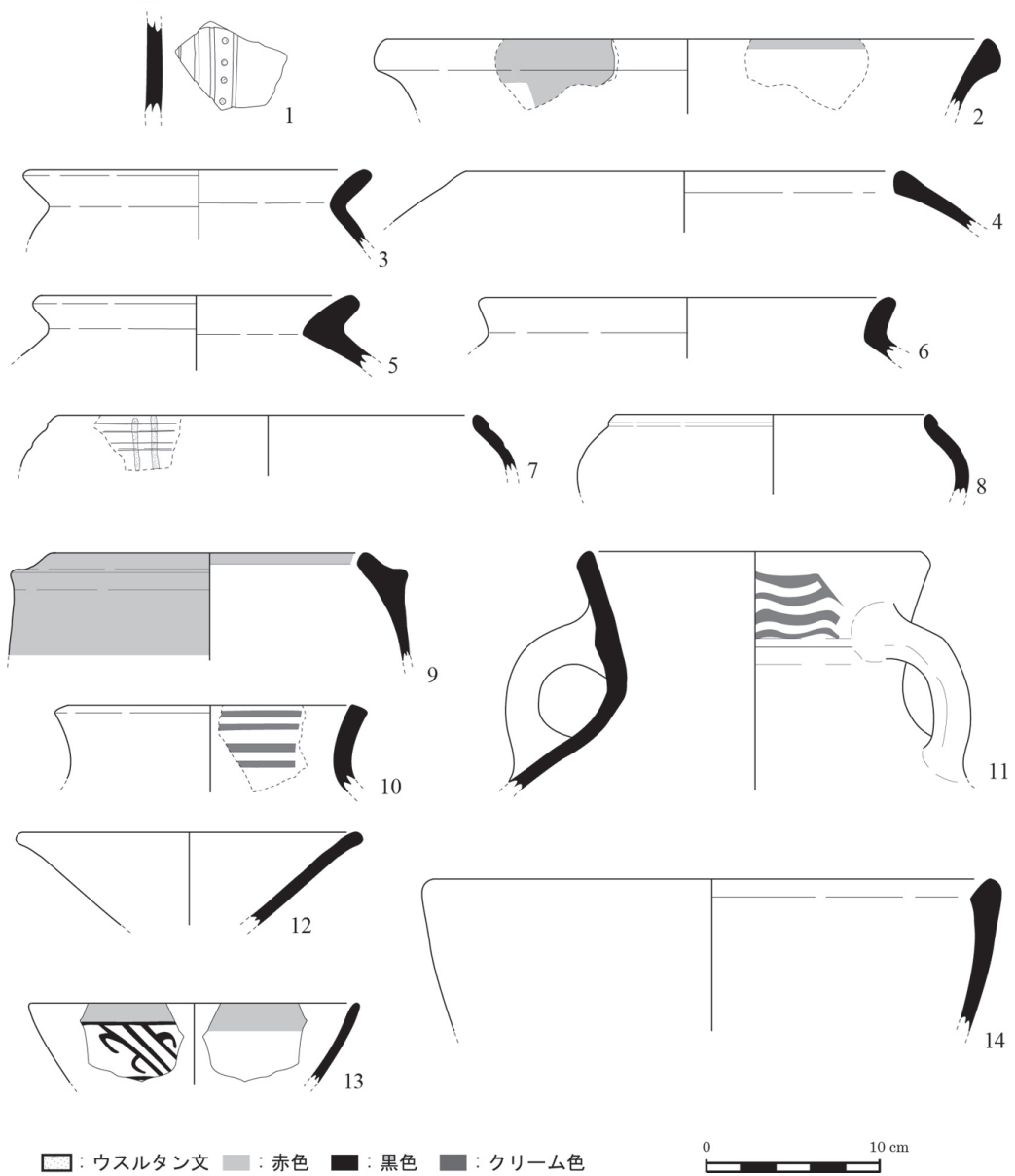


図9 エル・カンビオ遺跡におけるイロパンゴ火山灰より下層出土の主な土器

(1. Mizata, 2-3. Noualco, 4-6. Huascha, 7. Jicalapa, 8. Olocuitla, 9. Guazapa [Chorros], 10-11. Guazapa [Majagual], 12. La Presa, 13. Gualpopa, 14. Gumero)

なお、乳房状脚部、赤彩帯とウスルタン文様の装飾組み合わせ、オレンジ地厚手土器、高台といった先古典期終末期から古典期前期前半（後100～後400/450年）に特徴的な土器は、サン・アンドレス遺跡同様に、エル・カンビオ遺跡においても確認されていない。

4-2.3) エル・カンビオ遺跡におけるイロパンゴ火山灰より上層、ロマ・カルデラ火山灰より下層出土の土器

イロパンゴ火山灰より上層、ロマ・カルデラ火山灰より下層から出土した土器 (n=124) は 10 の土器グループが確認された (図 10)。イロパンゴ火山灰より下層出土の土器と比較すると、壺や深鉢といった器形には大きな変化は看取されないものの、Guazapa が多様化し、無頸壺の場合には口径が 40cm を超えるなど大型化の傾向があること、多彩色装飾が次第に顕著になってくることがこの時期の特徴といえる。

Guazapa グループでは、Chorros に加えて、化粧土削り文と赤彩が施されるタイプ (Miltitlan) と単にクリーム色の化粧土が施されるタイプ (Cashal) が出現する (図 10.1-3)。Chorros に代表的な無頸壺は口径が約 40cm と大型化するようである。Cashal は口径が 10cm 前後と小さく、口縁部が緩く弓状に外湾して立ち上がり、口縁部からやや下にフランジをもつ短頸壺である。フランジの上には赤彩が施される。Miltitlan は深鉢のみにみられるタイプである。

多彩色装飾は先の Gualpopa に加えて、Copador、Chancala、Machacal、Campana、Guarmal、Ulua、Arambala が新たに出現する (図 10.4-8)。本稿のサン・アンドレス遺跡出土資料では確認されていない Ulua は、暗褐色の化粧土に黒・赤の彩色文様が施される。多彩色装飾が施されるグループの土器の器形はいずれも碗である。器形は半球形や胴部から口縁部にかけて弓状に外反もしくは内湾するものなど多様である。

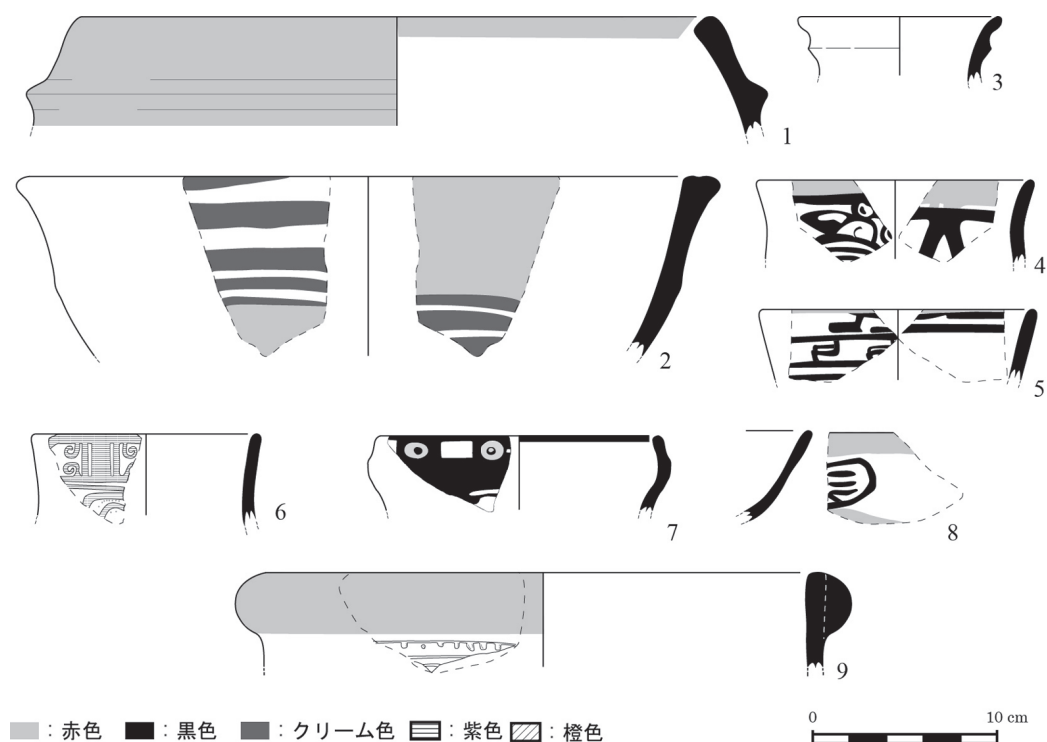


図 10 エル・カンビオ遺跡におけるイロパンゴ火山灰より上層、ロマ・カルデラ火山灰より下層の主な土器
(1. Guazapa [Chorros], 2. Guazapa [Miltitlan], 3. Guazapa [Cashal], 4. Copador, 5. Chancala, 6. Machacal, 7. Ulua, 8. Gualpopa, 9. Nohualco)

また、サン・アンドレス遺跡のイロパンゴ火山灰より上層ではほとんどみられない Huascha や Nohualco といった簡素な無頸壺や短頸壺が引き続き顕著にみられることも相違点にあげられよう。イロパンゴ火山の噴火以前に系譜が求められる Nohualco は、赤彩、刻線、列点が一個体に施されるという新たな装飾の組み合わせをもつタイプが追加される（図 10.9）。

4-2. 4) エル・カンビオ遺跡におけるロマ・カルデラ火山灰より上層、エル・ボケロン火山灰より下層出土の土器

ロマ・カルデラ火山灰より上層、エル・ボケロン火山灰より下層から出土した土器（ $n = 250$ ）は7つの土器グループに分類される（図 11）。器形では器壁が厚手の短頸壺や深鉢や浅鉢が引き続き主体である。装飾では Guazapa に新たに化粧土削り文の上に赤彩が施されるタイプ（Obraje）が加わるが（図 11.1）、多彩色装飾をもつ土器は、Gualpopa、Copador、Campana、Machacal に限られ、生産量が減少するようである（図 11.2-4）。El Pito というクリーム色の化粧土が特徴的な壺が新たにみられる（図 11.5）。イロパンゴ火山の噴火以前にその系譜が認められる Nohualco でも新たに細い刻線の上に細い赤彩が施されるものが追加される（図 11.6）。

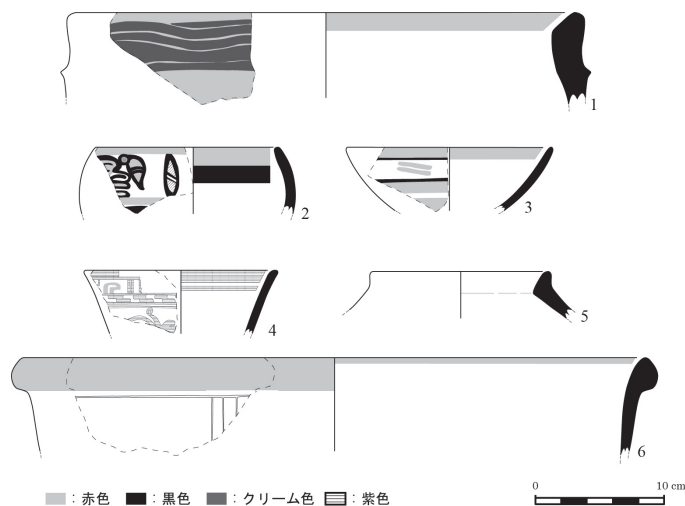


図 11 エル・カンビオ遺跡におけるロマ・カルデラ火山灰より上層、エル・ボケロン火山灰より下層出土の主な土器（1. Guazapa [Obraje], 2. Copador, 3. Gualpopa, 4. Machacal, 5. El Pito, 6. Nohualco）

4-2. 5) エル・ボケロン火山灰より上層出土の土器

エル・ボケロン火山灰より上層から出土した土器（ $n = 68$ ）は僅かに3つの土器グループに分類することができた。サン・アンドレス遺跡でみられたようなメキシコ中央高地または南部地域起源とされる Jegen は出土しておらず、多彩色装飾をもつ土器もみられない。出土している土器グループは、Guazapa（Chrrs と Majagual タイプ）、Huascha、Nohualco といったいずれもイロパンゴ火山の噴火以前に系譜を辿ることができるグループで、無頸壺や短頸壺、深鉢といった基本的な器形がみられる。

4-2.6) 小結

エル・カンビオ遺跡における土器伝統の通時的変化を俯瞰してみると、大まかな流れとしてはサン・アンドレス遺跡と類似するが、編年を検討する上で重要な点は次の3点であろう。

- ① サン・アンドレスの土器資料では困難であった Guazapa グループの変遷について火山灰層を鍵層として捉えることができた点である。イロパンゴ火山の噴火以前にまず Majagual と Chorros が出現する。イロパンゴ火山の噴火以後は、新たに Miltitlan と Cashal が出現する。Miltitlan の装飾技法は、化粧土削り文の Majagual と赤彩をもつ Chorros の系譜を引くものである。エル・カンビオ遺跡ではロマ・カルデラ火山の噴火以後には、新たに Obraje が出現する。ただし、ホヤ・デ・セレン遺跡ではロマ・カルデラ火山灰より下層から Obraje が出土しており、その出現はロマ・カルデラ火山の噴火以前に遡ることが確実である。Miltitlan の場合、化粧土削り文と赤彩が重なることはないが、Obraje はまず化粧土削り文が施されたその上に赤彩が施されるという施文技法に違いがみとめられる。このように Guazapa グループは、通時的に装飾技法が融合・変化していくことが明らかとなった
- ② Guazapa、Nohualco、Huascha といったイロパンゴ火山の噴火以前にその系譜が求められる土器グループが噴火後も一定程度みることができる点である。やや厚手で無頸・短頸壺や深鉢といった貯蔵を意図したと思われる器形の一群である。イロパンゴ火山灰より上層のコンテキストでは、後世の攪乱による混入という可能性も完全に否定できるものではないが、器形の細部や装飾のあり方に通時の変化が認められる。これらの土器グループは先行研究において在地的な土器と位置づけられており [Beaudry 1983:170]、在地の土器伝統が長期にわたり継承されつつ漸次的に変化しているものとしてここでは考えてみたい。
- ③ 多彩色土器の種類がロマ・カルデラ火山の噴火後に少なくなる点である。他方、サン・アンドレス遺跡ではロマ・カルデラ火山灰は確認できていないものの、古典期後期全般を通じてさまざまな多彩色土器が流通している点で違いがみられる。

5. サポティタン盆地の土器編年と社会過程

5-1. サポティタン盆地の土器編年案

ここでは、以上の2遺跡の土器データおよび既存の編年研究をもとに、おおまかではあるが、サポティタン盆地の新たな土器編年案を提示したい。本稿は相対編年の構築に主眼をおいているが、噴火年代と既存の年代測定データ [Sheets 1983; Mckee 2007: 296] を参照しながら暫定的に絶対年代も付与しておく。

サポティタンI期(前600～後100年): 先古典期中期後半から先古典期後期に相当する。Mizata、Nohualco、Huascha といった比較的粗製の鉢形もしくは短頸壺をはじめ、Jicalapa や Puxtla といった化粧土がオレンジ系で、表面にウスルタン文が施される浅鉢が顕著である。器形は、頸部が「く」の字状に強く外反する壺が顕著である。その他、胴部がやや外傾し、口縁部が肥厚または外に平坦になる浅鉢形土器もI期の特徴である。装飾は Mizata に代表されるようにやや粗い刻線が目立つ。彩色装飾も既にみられるが、口縁端部に赤帯彩色が施されるものが顕著である。胴部に施文される場合もあるが、刻線で区切られた範囲内に塗彩される。後代にみられるような彩色文様の複雑化はみられない。ウスルタン文は、最も洗練された技術段階と言われている Izalco グループの破片が少量出土しているが、大半はクリーム地の化粧土にオレンジ化粧土が施され、施文がコントロールできていない Jicalapa や Puxtla が目立つ。

Coquiama や Lamatepeque といった粗めの刻線に特徴付けられる土器グループは、より古い時期の土器群と位

置づけることも可能であるが、現時点では層位的な判断が困難であるため、ここではサポティタン盆地における居住開始期がより古くなる可能性を指摘するにとどめる。

サポティタンⅡ期（後 100～後 400/450 年）：先古典期終末期から古典期前期前半に相当する。この時期の土器の代表的な特徴は、乳房状脚部、高台、ウスルタン文と赤彩色の装飾組み合わせ、オレンジ地厚手浅鉢である。本稿で扱った資料にこれらの土器片はほとんど含まれないが、これらの諸特徴はサポティタン盆地東端に位置するヌエボ・ロウルデス遺跡のイロパンゴ火山灰より下層出土の土器片に顕著にみられる[Toledo 私信 2016]。

つづくⅢ期とⅡ期を区分する指標となる土器は Guazapa と Gualpopa である。この二つの土器グループは、エル・カンビオ遺跡ではイロパンゴ火山灰より下層から、サン・アンドレス遺跡ではイロパンゴ火山灰と床面の間の中間層から出土し始める。したがって、ここではイロパンゴ火山が噴火する直前・直後あたりから生産が開始されたものと考えたい。

サポティタンⅢ期（後 400/450～1000 年）：古典期前期後半から古典期後期・終末期に相当する。Ⅲ期は、多彩色土器が多様化することを区分の指標としてⅢa 期・Ⅲb 期に細分する。

Ⅲa 期（後 400/450～600 年）は、古典期前期後半に相当し、Guazapa や Gualpopa という二つの土器グループに代表される。化粧土削り文と多彩色装飾が特徴であるが、続くⅢb 期と比較して、いずれも多様性に欠ける点がⅢa 期の特徴である。また次第に半球形もしくは器面が平らな碗が顕著となっていく。

ロマ・カルデラ火山の噴火で埋没したホヤ・デ・セレン遺跡や同噴火の火山灰が確認できるエル・カンビオ遺跡では、ロマ・カルデラ火山灰下層より Copador や Campana が出土し、多彩色土器の多様化が既にみとめられる。従って、現時点ではⅢa 期とⅢb 期はおおよそ後 600 年頃に位置付けられると考えている。

つづくⅢb 期（後 600～1000 年）は、エル・カンビオ遺跡でロマ・カルデラ火山の噴火後に土器の生産活動が縮小されるようであるが、サポティタン盆地全体としては多彩色土器生産の最盛期に相当する。中でも Copador、Campana がⅢb 期の指標となる。彩色は赤色と黒色を基本とし、オレンジ色や白色が加わる場合もある。文様は直線・曲線の組み合わせによる抽象的な幾何学文様、デフォルメされた人物や動物が描かれる。解読不能の疑似文字が描かれる場合もある。この多彩色土器の隆盛と連動するように器形は、器面が平らな半球形の碗や円筒形が顕著となる。

今後さらなる検討を要するが、エル・カンビオ遺跡でみられるように、Ⅲ期全体を通して Huascha や Nohualco といったⅠ期に特徴的な簡素な土器に新たな属性が加わり引き続き生産されるようである。

サポティタンⅣ期（後 1000～1250 年）：エル・ボケロン火山の噴火以後の時期に相当し、多彩色土器がほとんどみられなくなる点に画期がみだせ、メキシコ中央高地もしくは南部地域の文化に由来する Jegen や口縁部と胴部を結ぶ巨大な把手や水平な把手をもつ Chuquezate や Sven といった簡素な土器がⅣ期を特徴づける土器と言える。本稿にかかわる調査では出土していないが、古典期終末期から後古典期前期の指標土器で、先行研究ではチアパス・グアテマラ太平洋岸が生産地と考えられている鉛釉土器も出土している[Amaroli 1996; Beaudry 1983:178]。その他、イロパンゴ火山の噴火以前に系譜を求めることのできる Guazapa、Nohualco、Huascha も引き続き新たな属性が加わり生産されているようである。

5-2. 土器編年からみるサポティタン盆地の社会過程

5-2.1) サポティタンⅠ期（前 600-後 100 年）

サポティタン盆地に人々が居住を開始する時期である。先にも述べたように、一部の土器の特徴から判断すれば、居住開始時期はより古くなる可能性もあるが、層位的関係と主たる土器からは、現時点では前 600 年頃

から活発な社会活動が開始されたと想定する。確認できる土器は、ウスルタン文様などチャルチュアパとの類似性がみとめられるものの、簡素な壺や鉢を主体とし、装飾も粗めの刻線を中心とする点にサポティタン盆地の地域性がうかがえる。サポティタンⅠ期後半には、エル・カンビオ遺跡において南北軸をもつ土製建造物群が建設される。これらの建造物群の周囲には耕作地の存在を示す畝状遺構が広範囲でみつかり、農耕と密接に絡んだ神聖な景観が生成されていたことが想定される。サン・アンドレス遺跡でも農耕の証拠となる畝状遺構がみつかり、この時期に相当する公共祭祀建造物群は今のところ見つからない。ここでは土器製作と農耕を営む小規模な集落像を想定しておきたい。

5-2.2) サポティタンⅡ期（後 100-400/450 年）

サン・アンドレス遺跡とエル・カンビオ遺跡の土器の出土状況から判断すると、サポティタン盆地社会は間断期であった可能性がある。先行研究では、イロパング火山の噴火によってサポティタン盆地社会は大打撃を受けると考えられているが [Sheets 1983]、噴火以前に既に社会活動、とりわけ土器生産に関しては収縮していたことが本稿の土器分析より明らかとなった。ただし全く活動がないというわけではなく、盆地南東端に位置するヌエボ・ロウルデス遺跡では乳房状脚部や高台などの特徴をもつ土器をともなう墓が見つかり、単に盆地内における社会活動の中心が移転もしくは分散していた可能性も想定しておきたい。

5-2.3) サポティタンⅢ期（後 400/450-1000 年）

イロパング火山の噴火直前・直後からサン・アンドレス遺跡が盆地内で覇権を握る時期に相当する。サン・アンドレス遺跡ではイロパング火山灰の直上に床面が形成されていることに鑑みれば、噴火後に比較的早く居住が再開された可能性が高い。ただし、罹災後の復興過程は緩やかで、最初は小規模な社会活動で *Guazapa* や *Gualpopa* といった新たな土器が作られるとともに、公共祭祀建造物群の建設が始まっていったと考えられる（＝Ⅲa 期）。しかし、サン・アンドレス遺跡では土器組成がⅠ・Ⅱ期と明瞭に異なることから、異なる土器伝統をもった集団が居住し始めた可能性もある。

Ⅲb 期の始まり、すなわち、後 600 年ごろから、サン・アンドレス遺跡ではアドベを主たる建築材とする公共祭祀建造物群が築造されていく。炭素 14 年代測定データに基づけば、ホヤ・デ・セレン遺跡やヌエボ・ロウルデス遺跡の社会活動もこの時期に相当する [Ichikawa et al. 2015]。こうした盆地全体の社会活動の活性化と連動して、Ⅲb 期にはさまざまな多彩色土器が生産・流通するようになる。*Copador*、*Gualpopa*、*Arambala* はチャルチュアパ遺跡でも頻出しているが、サン・アンドレス遺跡ではそれらに加えて、*Campana* や *Chancala* が目立ち、*Ulua* や *Salua* などのエルサルバドル東部やホンジュラス中西部に特有の多彩色土器が出土していることも特徴である。このことからサポティタン盆地の社会集団は盆地外の社会集団と緩い文化的交流をもちながら、在地の新しい土器伝統を醸成していったことが推察される。土器以外に盆地外の集団との交流を示唆する考古資料としては、7 号建造物で出土したエキセントリック形石器などの供物である。エキセントリック形石器は、最も近いところではコパン遺跡から出土しており、コパン王朝と政治的関係な存在したことが考えられる。

Ⅲb 期の状況をその他の考古資料から、もう少し詳しく見てみよう。サン・アンドレス遺跡ではアクロポリスの形成過程から新たな支配者層の戦略が垣間見えそうである。アクロポリスは複数の土製建造物群とそれらに囲まれるように形成された広場で構成されている（図 2）。しかし、これらは一度に築造されたわけではなく、はじめに複数の建造物群が独立して築造され、その後、推定 6 万個といわれるアドベで各建造物間を埋めることで広場が形成され、アクロポリスとなった。アクロポリス外から広場内を覗き込むことはできず、広場への

アクセスは限定的であった。広場では石彫、多彩色土器、埋葬などが見つかり、なんらかの儀礼が営まれていたに違いない。安直のそしりを免れないが、埋葬がみつまっていることから祖先崇拜などに関する儀礼であろうか。このように多くの労働量を集約し、視認性やアクセスを限定した広場を形成して儀礼を行う背後には、社会をコントロールする支配者層の新たな戦略がうかがえる。おそらくは、それまでに明確ではなかった社会格差が生じる中で、支配者がより政治権力や富みを独占しようとしたのではないだろうか。

その後、サン・アンドレスはエル・ボケロン火山が噴火する以前に衰退の方向に向かっていくようである。アクロポリス東側に位置する 13 号建造物では壁が崩落、5 号建造物でも基壇部は一段目をのぞき、その原形をとどめていないことをその根拠とすることができるだろう。

5-2.4) サポティタン IV 期（後 1000-1200 年）

エル・ボケロン火山の噴火後に相当する時期である。盆地全体として、多彩色土器がほとんどみられなくなる。他方で、サン・アンドレス遺跡においてメキシコ中央高地もしくは南部地域の影響を受けた土器が出土することから、新たな土器伝統を有する集団が居住し始めたと考えられる。これらの集団は、B 号建造物にみられる凝灰岩ブロックを用いた新たな技術を駆使した建造物を築いた。さらに既に崩壊していた 5 号建造物では、凝灰岩ブロックや平石を利用して既存の建造物を覆うように増改築している。エル・カンピオ遺跡ではイロパンゴ火山の噴火以前にその系譜が認められる日常什器が生産され続けており、小規模ながら伝統的な土器生産活動が営まれていた可能性も考えておきたい。これらの諸活動がどのように終焉していくのかについて、現時点では不明であるが、少なくとも後古典期後期の所産と考えられるような遺構・遺物は確認できていない。

6. メソアメリカ文明史の中のサポティタン盆地

最後にサポティタン盆地の編年と社会過程をよりマクロなコンテキストに位置づけ、本稿をまとめる。細部にさまざまな検討課題が浮上すると思われるが、ここでは大局的に見解を提示し、今後の研究の指針としたい。

サポティタン I 期は、一般的にはマヤ南部地域でタカリク・アバフ、イサパ、カミナルフユに代表されるように石彫文化が隆盛を極め、社会の複雑化が急速に進行する時期といわれてきた [e.g. Love 2011]。一方、近年では編年の見直しによって前 400 年頃にメキシコ湾岸の中心センターであったラ・ベンタが衰退することによりマヤ南部地域の各センターもその余波を受け一時的に衰退するとも考えられている [Inomata et al. 2014:402]。そして前 100 年頃に政治的エリートや中央集権的な政治組織がマヤ地域の広い範囲で形成されるという [Inomata et al. 2014:403]。本稿はこれらの問題を議論するデータは有していないが、サポティタン盆地では石彫製作の痕跡は認められず、大きな社会変化を示すような痕跡も認められない。むしろ、土器や建築には当該地域の有力センターであったチャルチュアパの文化的影響をうけながらも、地域色のある土器製作、農耕を中心とした社会活動を営んでいたようである。

サポティタン II 期、とりわけ II 期の前半に相当する先古典期終末期（後 100-後 250/300 年）はマヤ地域の転換期である。この時期に相当する建築や土器はヌエボ・ロウルデス遺跡を除けばほとんど看取することができず、サポティタン盆地の社会活動は収縮傾向にあったと考えられる。続く II 期の後半に相当する古典期前期前半（後 250/300-450 年頃）には先古典期後期から終末期にかけて興隆した大小のセンターの社会活動が急速に衰退するというが [Love 2007:299-230]、サポティタン盆地における社会活動は引き続き停滞したものであった。一方のチャルチュアパ遺跡ではカサ・ブランカ地区で公共祭祀建造物の破壊または倒壊が認められるものの

[Murano 2008]、古典期前期前半にはタスマル地区に社会の中心が移行し、当該地域での存在感がさらに増した。この頃からチャルチュアパでは三脚円筒形土器をはじめとしてテオティワカン的な文化要素が受容されることがわかっているが[市川 2012:132]、サポティタン盆地までその影響は認められないようである。

そして、II 期の終わり、後 400-450 年頃にイロパンゴ火山の噴火が起こる。

サポティタン III 期は、マヤ低地の諸センターの隆盛期にあたる。マヤ地域の南東端に位置するサポティタン盆地では、イロパンゴ火山の噴火の影響を受けつつも、緩やかに復興し、後 600 年頃からはサン・アンドレスがサポティタン盆地の政治・宗教・経済の中心センターとして発展する。Copador やエキセントリック形石器にみられるようにコパン王朝との政治経済的関係を強化していきながら、盆地内の存在感を強めていったのであろう。その他にも積極的に遠距離センターとの文化的交流がうかがえる。例えば、メキシコ湾岸文化との交流を示すユーゴや、エルサルバドル東部やホンジュラス中西部に特徴的な Uluja などの土器グループの存在がそれを示す。

エル・ボケロン火山の噴火後に相当するサポティタン IV 期は、マヤ低地の諸都市の衰退やメキシコ中央高地の諸都市の群雄割拠時代に突入する古典期終末期から後古典期前期に相当する。サン・アンドレス遺跡で確認することのできた Mixteca-Puebla 様式に類似する土器 (Jegen) はメキシコ中央高地あるいは南部地域からの民族集団の移動の議論にかかわる資料である^(註9) [Fowler Jr. 1981]。この土器はエルサルバドル中央部でも北に位置する後古典期のセンター、シワタン遺跡で頻出している [Amaroli and Bruhns 2013]。同遺跡では、I 字型の球技場、エヘカトル神信仰と関連する円形建築など、メキシコ中央高地あるいは南部地域の文化的影響を多分に受けている。P・アマロリらは、Jegen の製作技術や図像表現が古典期後期の多彩色土器である Copador や Salua と類似することから、古典期後期から継続する土器伝統を下地として、外部からの影響をうけながら在地発展したものであると位置づけている [Amaroli and Bruhns 2013:235]。現時点ではこの仮説を検証しうる資料を筆者らは持ち合わせていないため、移住説あるいは在地発展説については今後の課題となろう。

7. おわりに

今回用いた土器資料は火山灰を鍵層としているものの原位置出土の資料がないという制約が残るため、課題も多い。本稿では大まかな編年案を提示したにすぎない。本稿を足がかりとして、1940 年代や 90 年代の既出資料の見直しや国立人類学博物館所蔵の完形品などを調査しながら、精緻化をはかっていく予定である。また発掘調査によって、サン・アンドレス遺跡やエル・カンビオ遺跡の各建築シークエンスを詳細にしていき、それらの建築データと土器分析、さらには炭化物試料の年代測定を実施、本稿で提案した編年により整合的な絶対年代を付与していく作業を継続していきたい。

【謝辞】

本稿の作成にかかる調査研究の実施には、エルサルバドル共和国文化庁文化遺産局考古課の方々に大変お世話になりました。とくに柴田潮音氏、O・カマチョ氏、H・ディアス氏には調査計画から実施に至るまで多くのご支援を賜りました。深謝申し上げます。また調査に参加していただいた学生や作業員の皆様にも感謝申し上げます。本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金 (課題番号 26101003)、大幸財団平成 27 年度人文・社会科学系学術研究助成 (課題番号 11029)、平成 27 年度高梨研究助成金の支援を受けたものである。最後に、査読者 2 名の方から有益なご意見をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

- (註1) 言語集団や民族集団についてはよくわかっていないが、マヤ高地や南太平洋岸地域は大まかに「マヤ南部地域」と区分されている [e.g. Inomata et al. 2014:377; Love 2011: 6-7]。本稿では、現在のホンジュラス西部、レンパ川を境界とするエルサルバドル高地・太平洋岸の地理的範囲を「マヤ南東地域」として論を進めることにする。
- (註2) 本稿は、2章を市川が、3章を八木が単独執筆し、その他は市川・八木が共同で執筆した。
- (註3) このほかにもラグナ・カルデラやラグナ・シエナガなど、火山噴火の発生が確認されているが [Ferrés et al. 2011:836]、これまで調査の対象となってきた遺跡では明瞭に視認できるほどの火山灰は確認できない。
- (註4) テオティワカン系遺物・遺構は、「三脚円筒形土器、水差し形土器、タルー・タブレロ建築、カンデレーロ」を指す。
- (註5) 1978年の発掘調査はR・クレインらによって実施されたが、報告書は未刊行のままである。その約20年後に土器を分析したP・アマロリは、各調査区で出土する土器資料を既存の土器分類に当て嵌める形で作業を進めていった [Amaroli 1996]。
- (註6) Operation 99-2で検出された焼土層から採取された試料である。エル・ボケロン火山灰よりは下層である。年代測定先や同位体補正の有無などは不明だが、炭素年代が 1110 ± 45 年、 1130 ± 45 年という結果が得られている。暦年較正をすると各々 $777-1018$ cal AD(2σ)、 $775-993$ cal AD(2σ)である。
- (註7) エ国考古課が実施した2011-2012年の出土遺物の分析については、当時の調査主任であったオスカル・カマチョ氏の許可を得ている。
- (註8) 2015年に実施した1号トレンチと2号トレンチは、いずれも建造物の基壇部に設定されている。基壇部上面に建設された建造物の発掘調査ではエル・ボケロン火山灰は確認されていないので、おそらく高所から低所、つまり降灰後に基壇部へ火山灰が流れ落ちたと想定している。その後、建造物が放棄され自然にさらされている過程で、噴火後の堆積層にそれ以前の遺物が混入している可能性がある。
- (註9) ピピルに代表されるナワ語系集団が一般的には想定されているが [Fowler Jr. 1981]、必ずしもそれらを支持する考古資料は得られておらず特定できる段階にはないため、「メキシコ中央高地・南部地域」というより広義の意味で捉える方が良いと主張する立場もある [Amaroli and Bruhns 2013]。筆者らも後者の立場を支持する。

参考文献

- Amaroli, P.
1996 *Investigaciones Arqueológicas en el Área de Nuevas Instalaciones en el Parque Arqueológico San Andrés*. Informe preparado para el Patronato Pro-Patrimonio Cultural, El Salvador.
- Amaroli, P., and K.O. Bruhns
2013 450 Years Too Soon: Mixteca-Puebla Style Polychrome Ceramics in El Salvador. *Anales del Instituto de Investigaciones Estéticas* XXXV 103: 231-249.
- Andrews, W.

- 1976 *The Archaeology of Quelepa, El Salvador*. Middle American Research Institute, Tulane University, New Orleans.
- 青山和夫
- 2015 「マヤ文明の起源と公共祭祀：グアテマラ・セイバル遺跡の公共祭祀建築と緑色石製磨製石斧の供物を中心に」 『古代文化』 67(2) :53-72。
- Ball, J.W.
- 2014 Rethinking the Becán Ceramic Sequence –Disjunctions, Continuities, Segmentation, and Chronology. *Latin American Antiquity* 25(4): 427-448.
- Beaudry, M.P.
- 1983 The Ceramics of the Zapotitán Valley. In *Archaeology and Volcanism in Central America*, edited by P. D. Sheets, pp.159-190, University of Texas Press, Austin.
- 2002 Ceramics and Their Use at Ceren. In *Before the Volcano Erupted: The Ancient Ceren Village in Central America*, edited by Sheet, P., pp.117-138, University of Texas Press, Austin.
- Begley, C., T. Sullivan, L. Brown, A. Wilson y K. Sampeck
- 1996 *Proyecto Arqueológico San Andrés: Informe 1996, Tomo I*. Informe preparado para el Patronato Pro-Patrimonio Cultural, El Salvador.
- Begley, C., R. Gallardo, J. Card, A. Wilson, L. Brown y N. Herrmann
- 1997 *Proyecto Arqueológico San Andrés: Informe 1997*. Informe preparado para el Patronato Pro-Patrimonio Cultural, El Salvador.
- Braswell, G.E., and M.A. Gutiérrez
- 2014 Letter from the Co-editors. *Latin American Antiquity* 25(4): 375.
- Braswell, G.E. (ed.)
- 2012 *The Ancient Maya of Mexico: Reinterpreting the Past of the Northern Maya Lowlands*. Equinox, Bristol.
- Boggs, Stanley H.
- 1943 Notas sobre las excavaciones en la Hacienda “San Andrés”, Departamento de La Libertad. *Tzunpame* Año III (1): 104-126.
- Camacho, O. y H. Díaz
- 2014 Análisis de los materiales arqueológicos de las temporadas 2011-2012, del Proyecto Arqueológico San Andrés, Valle de Zapotitán, El Salvador. En *XXVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 2013*, editado por B. Arroyo L. Méndez Salinas y A. Rojas, pp. 571-580, Ministerio de Cultura y Deportes, Instituto de Antropología e Historia, Asociación Tikal, Guatemala.
- Castillo, R.
- 2007 *Informe Final Proyecto Arqueológico “EL CAMBIO” Temporada 2006-2007* presentado a la Dirección Nacional de Patrimonio Cultural, San Salvador, El Salvador.
- Castillo, V. y T. Inomata (eds)
- 2012 *Proyecto Arqueológico Ceibal-Petexbatun Informe de la Temporada de Campo 2012*. Informe entregado al Instituto de Antropología e Historia, Guatemala.
- Chávez, H.I.
- 2009 *El Entierro Preclásico EC I “8A Extensión-a” temporada 2006/07 del Sitio Arqueológico El Cambio Valle de*

- Zapotitán, San Juan Opico, La Libertad*. Tesis de licenciatura entregado a la Universidad Tecnológica de El Salvador, San Salvador.
- Chávez, J.A., W. Hernández y L. Kospecky
- 2012 Problemático y conocimiento actual de las tefras tierra blanca joven en el área metropolitana de San Salvador, El Salvador. *Revista Geológica de América Central* 47:117-132.
- Culbert, T.P.
- 1993 *Tikal Reports No.25: The Ceramics of Tikal*. University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Demarest, A.A
- 1986 *The Archaeology of Santa Leticia and the Rise of Maya Civilization*. Middle American Research Institute Publication No. 52. Tulane University, New Orleans.
- 1988 Political Evolution in the Maya Borderlands: The Salvadoran Frontier. In *The Southeast Classic Maya Zone*, edited by Boone, E.H. and G.R. Willey, pp.335-394, Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- 2011 Political, Economic, and Cultural Correlates of Late Preclassic Southern Highland Material Culture. In *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and Fall of an Early Mesoamerican Civilization*, edited by Love, M. and J. Kaplan, pp.345-386, University Press of Colorado, Colorado.
- Díaz, H., O. Camacho, K. García, J. Guerra, K. López, D. Messana, S. Shibata y M. Yoshidome
- 2013 Proyecto arqueológico San Andrés, Temporada 2011, El Salvador. En *XXVI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 2012*, editado por B. Arroyo y L. Méndez Salinas, pp.343-351, Ministerio de Cultura y Deportes, Instituto de Antropología e Historia, Asociación Tikal, Guatemala.
- Dull, R., J. Southon, and P. Sheets
- 2001 Volcanism, Ecology and Culture: A Reassessment of the Volcan Ilopango TBJ Eruption in the Southern Maya Realm. *Latin American Antiquity* 12: 25-44.
- Dull, R, J. Southon, S. Kutterolf, A. Freundt, D. Wahland, and P. Sheets
- 2010 Did the TBJ Ilopango Eruption Cause the AD536 Event? *American Geophysical Union Fall Meeting abstract* 2010.
- Ferrés, D., H. Delgado Granados, W. Hernández, C. Puilinger, H. Chávez, R. Castillo Taracena, and C. Cañas-Dinarte.
- 2011 Three Thousand Years of Flank and Central Vent Eruptions of the San Salvador Volcanic Complex (El Salvador) and Their Effects on El Cambio Archaeological Site: A Review based on tephrostratigraphy. *Bulletin of Volcanology* 73(7): 833-850.
- Fowler Jr, W.R.
- 1981 *The Pipil-Nicarao of Central America*. Ph.D. Dissertation presented for University of Calgary, Calgary.
- Gamio, M.
- 1922 *La Población del Valle de Teotihuacán*. Talleres gráficos de la Secretaría de Educación Pública, México.
- Gifford, J.C.
- 1976 *Prehistoric Pottery Analysis and the Ceramics of Barton Ramie in the Belize Valley*. Peabody Museum Memoirs Vol.18. Harvard University, Cambridge.
- González, M.
- 2006 *Investigación Arqueológica del Área Impactada por el Proyecto de Urbanización; Informe Final El Cambio*.

Archivo de Departamento de Arqueología, CONCULTURA, San Salvador.

Gordon, W.R., and P. Phillips

- 1955 Method and Theory in American Archaeology II: Historical-Developmental Interpretation. *American Anthropologist* 57(4): 723-819.

市川 彰 (Ichikawa, A.)

- 2012 「メソアメリカ南東部における先古典期から古典期への社会変化とその背景」『古代文化』64(2):117-136。
 2014 『メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究』名古屋大学文学研究科博士学位論文。
 2016 Cuando y cómo fue la erupción del Volcán Ilopango, El Salvador; Síntesis desde la óptica arqueológica. *Journal of School of Letters, Nagoya University* 12: 23-43.

Ichikawa, A., R. Gallardo, H. Díaz y J. Alvarado

- 2015 Nuevos datos de radiocarbono relacionados con la erupción del Volcán Ilopango. *Anales del Museo Nacional de Antropología Dr. David J. Guzmán* 53(4): 160-175.

Inomata, T., J. MacLellan, and M. Burham

- 2015 The Construction of Public and Domestic Spheres in the Preclassic Maya Lowlands. *American Anthropologist* 117(3): 519-534.

Inomata, T., R. Ortiz, B. Arroyo, and E.J. Robinson

- 2014 Chronological Revision of Preclassic Kaminaljuyú, Guatemala: Implications for Social Processes in the Southern Maya Area. *Latin American Antiquity* 25(4): 377-408.

Inomata, T., D. Triadan, K. Aoyama, V. Castillo, and H. Yonenobu

- 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origin of Lowland Maya Civilization. *Science* 340(6131): 467-471.

Joyce, R.A.

- 2004 Mesoamerica: A Working Model for Archaeology. In *Mesoamerican Archaeology* edited by J.A. Hendon and R.A. Joyce, pp.1-42, Blackwell, Oxford.

嘉幡 茂・村上達也

- 2015 「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元：『トラランカレカ考古学プロジェクト』の目的と調査動向」『古代文化』67(3):99-109。

Longyear, J.

- 1952 *Copan Ceramics: A Study of Southeastern Maya Pottery*. Publication 597. Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.

Love, M.

- 2007 Recent Research in the Southern Highlands and Pacific Coast of Mesoamerica. *Journal of Archaeological Research* 15: 275-238.
 2011 Critical Issues in the Southern Maya Region and the Late Preclassic Period. In *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and Fall of an Early Mesoamerican Civilization*, edited by Love, M. and J. Kaplan, pp.3-24, University Press of Colorado, Colorado.

Mason, J.A.

- 1941a Notes and News. *American Antiquity* 6(3): 272-287.

- 1941b Notes and News. *American Antiquity* 7(1): 75-83.
- McKee, B.
- 2007 *Volcanism, Household Archaeology, and Formation Processes in the Zapotitan Valley, El Salvador*. Ph.D. Dissertation presented for University of Arizona.
- Mejía, J.
- 1977 *Excavaciones en las Ruinas de San Andrés*. Tomado del manuscrito original entregado como informe al Departamento de Arqueología. El Salvador.
- 1984 Las "Ruinas de San Andrés" excavaciones en la Estructura-7. *Flama* 14: 33-48.
- Murano, M.
- 2008 *Informe Final: Proyecto "Restauración e Investigación Arqueológica en la Estructura-5 y el Montículo 6 del Parque Arqueológico Casa Blanca"*. Comité de Restauración del Templo Santiago Apóstol, Departamento de Arqueología de CONCULTURA, JICA, El Salvador.
- Rattray, E
- 2001 *Teotihuacan: Ceramics, Chronology and Cultural Trends*. University of Pittsburgh, and INAH, Mexico.
- Rice, P.M.
- 1987 *Pottery analysis: A sourcebook*. University of Chicago Press, Chicago.
- Ries, M.
- 1940 First Season's Archaeological Work at Campana San Andrés. *American Anthropologist*, New Series 42(4): 712-713.
- Sabloff, J.A.
- 1975 *Excavations at Seibal, Department of Petén, Guatemala*. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology vol. 13 No.1 and 2. Harvard University, Cambridge.
- Sharer, R.J.
- 1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador vol. I-III*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Sharer, R.J., and L.P. Traxler
- 2006 *The Ancient Maya* (6th edition). Stanford University, California.
- Sheets, P.D.
- 1983 Introduction. In *Archaeology and Volcanism in Central America: the Zapotitán Valley of El Salvador*, edited by Sheets, P.D., pp.1-13, University of Texas Press, Austin.
- 1999 The effects of Explosive Volcanism on Ancient Egalitarian, Ranked, and Stratified Societies in Middle America. In *The Angry Earth: Disaster in Anthropological Perspective*, edited by Oliver-Smith, A. and S.M. Hoffman, pp.36-58, Routledge, New York and London.
- 2000 Provisioning the Ceren Household. *Ancient Mesoamerica* 11(2): 217-230.
- 2007 People and Volcanoes in the Zapotitán Valley. In *Living with the Shadow: The Cultural Impacts of Volcanic Eruptions*, edited by Grattan, J. and R. Torrence, pp.67-89, Left Coast Press, California.
- 2009 Who were those Classic Period Immigrants into the Zapotitan Valley, El Salvador. In *The Ch'orti' Maya Area*, edited by Metz, B.E., C.L. McNeil and K.M. Hull, pp.61-77, University Press of Florida, Florida.
- Shepard, A.O.

- 1956 *Ceramics for the Archaeologist*. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
- Shook, E., and M.P. de Hatch
- 1999 Las tierras altas centrales: Periodos preclásico y clásico. In *Historia general de Guatemala, Tomo 1: Epoca precolombina*, edited by Marion Popenoe de Hatch, pp.289-318, Fondo para la Cultura y el Desarrollo, Guatemala.
- Shibata, S. y Moran, L
- 2009 *Informe del Proyecto El Cambio temporada 2009*. Informe presentado al Juzgado de Paz de San Juan Opico, La Libertad, El Salvador.
- Skibo, J.M.
- 2013 *Understanding Pottery Function*. Springer, New York.
- 寺崎秀一郎
- 2002 「コパドール多彩色土器の再検討」 『史観』 146:66-86。
- Taylor, R.E., and C.W. Meighan (eds)
- 1978 *Chronologies in New World Archaeology*. Academic Press, New York.
- Viel, R.
- 1993 *Evolución de la Cerámica de Copan, Honduras*. Instituto Hondureño de Antropología e Historia, Tegucigalpa.
- Wiley, G., R.M. Leventhal, A.A. Demarest, and W.L. Fash Jr.
- 1994 *Ceramics and Artifacts from Excavations in the Copan Residential Zone*. Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University Vol. 80, Massachusetts.
- Wilson, A.
- 2013 *San Andrés, El Salvador Ceramic Analysis*. (<http://campanaceramics.com/blog.html>)
- Wobst, H.M.
- 1977 Stylistic behavior and information exchange. In *For the Director: Research Essays in Honor of James B. Griffin*, edited by Cleland, C.E., pp.317-42, Anthropological Papers No.61. Museum of Anthropology, University of Michigan, Ann Arbor.

Reconsideración de la cronología del valle de Zapotitán, Sureste Maya: Análisis tefrocronológicos y cerámicos

Ichikawa Akira

(Instituto de Estudios Avanzados, Universidad de Nagoya)

Yagi Hiroaki

(Universidad de Ehime)

Palabras claves: Cronología, Cerámica, Valle de Zapotitán, San Andrés, El Cambio

La cronología es un tema crucial en la arqueología, ya que a través de ella podemos reconstruir diacrónicamente una larga trayectoria histórica del sitio y su región. En el valle de Zapotitán, ubicado en el lado occidente de El Salvador se observan al menos tres indicios de eventos volcánicos: Ilopango (400-450 años d.C.), Loma Caldera (aproximadamente 650 años d.C.) y El Boquerón (964-1040 años d.C.), importantes evidencias para reconstruir la línea del tiempo en la historia del valle, ante muchos datos arqueológicos que generan una amplia discusión sobre el desarrollo sociocultural en la región en la época prehispánica.

El presente artículo posee dos objetivos: 1) Proponer una nueva cronología del valle de Zapotitán, El Salvador a través de la tefrocronología y los análisis cerámicos de dos sitios arqueológicos: San Andrés y El Cambio. 2) Reconstruir el proceso social, en base a nueva cronología y los datos arqueológicos disponibles. Como resultados, se propone una nueva cronología que abarca desde el 600 a.C. hasta el 1200 d.C, considerando cuatro fases marcadas por los eventos volcánicos observados, así como las características cerámicas determinadas en base a los análisis:

Zapotitán I (600 a.C.-100 d.C.): el primer asentamiento del valle se remontaría hacia el 600 a.C. Las características cerámicas correspondientes a la fase Zapotitán I son incisión burda como el grupo Mizata, decoración del estilo Usulután como los grupos Jicalapa y Puxtla, cántaro sin engobe o con banda roja como Huascaha y Nohualco. Al final de esta fase, el sitio El Cambio fungió como centro ceremonial, ya que consiste en varias estructuras construidas por medio de tierra compactada. En el sitio San Andrés todavía no se ha confirmado ninguna estructura que corresponde a la fase Zapotitán I.

Zapotitán II (100-400/450 d.C.): A pesar de que en el sitio Nuevo Lourdes Poniente se puede observar fabricación de cerámica y actividades funerarias, las dinámicas sociales disminuyeron. Los marcadores cerámicos de esta fase son mamiformes, base anular, combinación de decoración estilo Usulután y banda roja. Sin embargo, son ausentes en la mayor parte de los sitios del valle de Zapotitán. Es importante mencionar que dichos indicios apuntan a que las dinámicas sociales habían disminuido antes de la erupción del Volcán Ilopango.

Zapotitán III (400/450-1000 d.C.): La fase Zapotitán III se dividen dos sub-fases por características cerámicas y la magnitud de dinámica social. Surge la fase IIIa que corresponde a la fase de recuperación gradual después de la erupción del Volcán Ilopango. Las cerámicas representativas son los grupos Guazapa y Gualpopa. La fase IIIb corresponde al apogeo de San Andrés y se fabricaron varios tipos de cerámica policroma como Copador y Campana. Según los datos arqueológicos disponibles, San Andrés interactuaba con otros grupos sociales cercanos y lejanos, tales como Copán o algunos sitios de Petén en Guatemala, el Golfo de México, la zona oriental del actual territorio salvadoreño y parte de Honduras. Por las evidencias del colapso de algunas estructuras de San Andrés en el contexto debajo de la capa volcánica proveniente de El Boquerón, se

puede inferir que antes de la erupción de El Boquerón el prestigio de San Andrés había decaído.

Zapotitán IV (1000 d.C.-1200 d.C.): Después de la erupción de El Boquerón en la cerámica del valle de Zapotitán se observa una influencia del altiplano central o sur de México como el grupo Jegen. También, apareció nuevo estilo arquitectónico, el cual es el uso de bloques de toba como el Montículo B y la última fase de la Estructura-5 del sitio San Andrés.

Aunque es necesario obtener datos de radiocarbono relacionados en los sitios del valle de Zapotitán, este artículo contribuirá a comprender mejor la larga historia del mismo valle y establecer una cronología regional en el sureste Maya.

原稿受領日 2016年5月20日

原稿採択決定日 2016年8月9日